特別号

外務省 総合職 内定者ノート 2026



特集

世界史を描く最前線へ

外務省へ入省しよう

- 公務員試験の対策方法
- 官庁訪問の流れと対策
- 内定者の就職活動　など

目次

01. 内定者基本情報
（P.2-７）

02. 公務員試験対策
（P.８-27）

03. 官庁訪問対策
（P.28-43）

04. 内定者の就職活動
（P.44-63）

05. 様々な内定者
（P.64-72）

06. 採用担当者への
インタビュー
（P.73-76）

内定者からの
メッセージ
（P.77）

01. 内定者基本情報

外務省内定者は、専門性や海外経験、外交の道を目指すまでの経緯において多様なバックグラウンドを持っています。

外務省に入るための決まった道や「正解」はないということを知っていただければと思います。

１．内定者基本情報

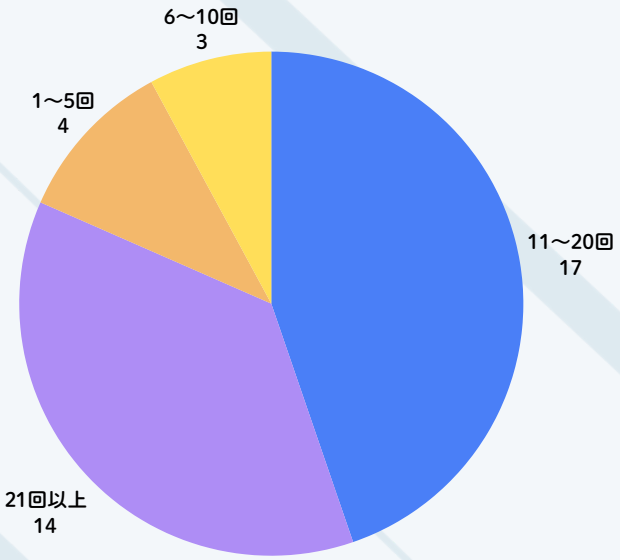
官庁訪問先

訪問省庁	1日目	2日目	3日目
外務省	33	5	
防衛省	3	8	4
財務省	1	2	1
警察庁	1	2	
経済産業省		6	3
厚生労働省		1	1
国土交通省		1	
農林水産省		1	1
文部科学省		1	
財務省税関			1
訪問なし		11	27

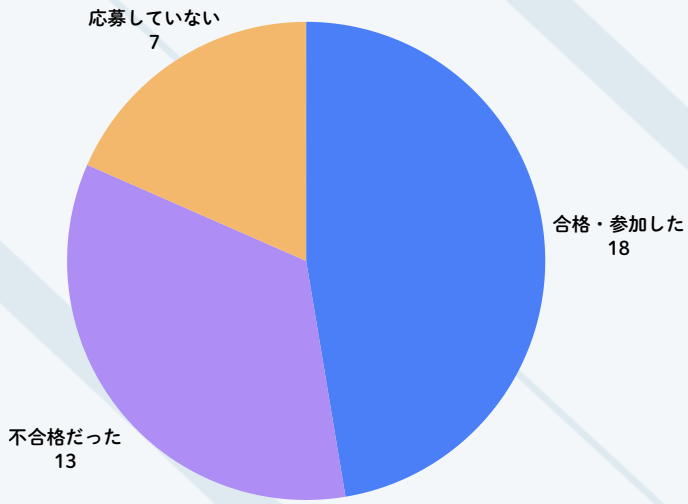
最終学歴

	大学	学部	人数	
学部	東京大学	教養	5	11
		法	4	
		文	2	
	慶應義塾大学	総合政策	1	7
		法	6	
	京都大学	総合人間	1	5
		文	1	
		法	3	
	一橋大学	商	1	2
		法	1	
	早稲田大学	国際教養	1	2
		政治経済	1	
	同志社大学	グローバル・コミュニケーション	1	
	コロンビア大学	政治	1	
	ハーバード大学	政治	1	
修士	東京大学大学院	公共政策	3	
	京都大学大学院	公共政策	1	
	慶應義塾大学大学院	法学研究科	1	
	国際基督教大学大学院	公共政策社会研究専攻・政治国際研究	1	
	筑波大学大学院	国際公共政策	1	
	早稲田大学大学院	政治学研究科	1	

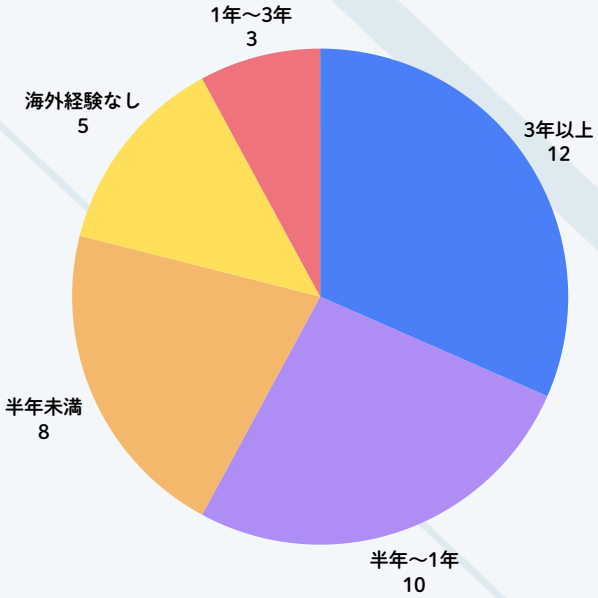
説明会・イベント参加回数



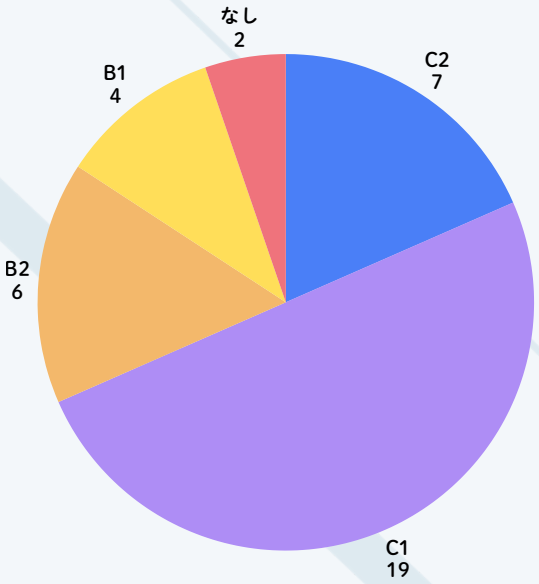
外務省 インターン参加有無



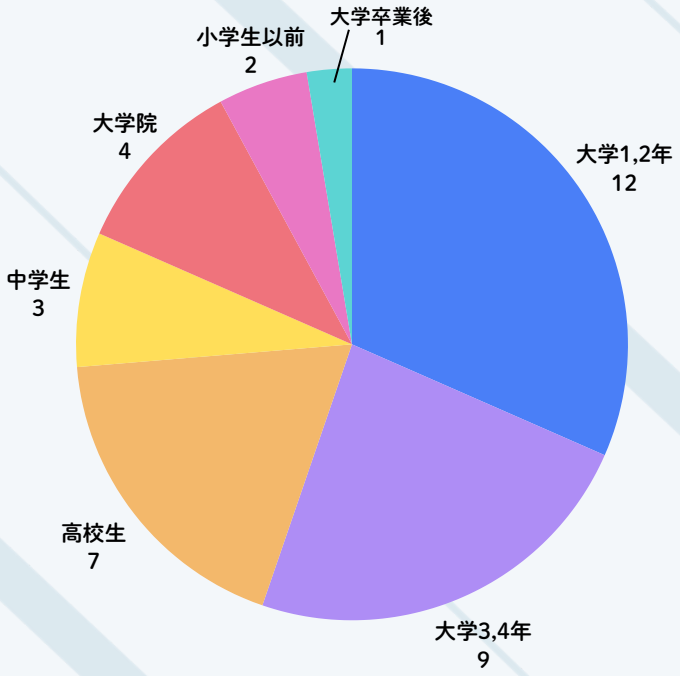
海外経験



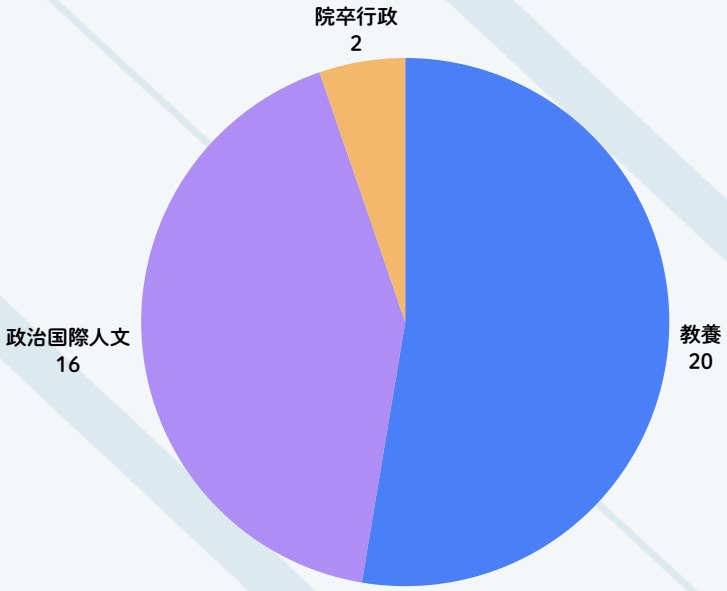
官庁訪問時の英語スコア



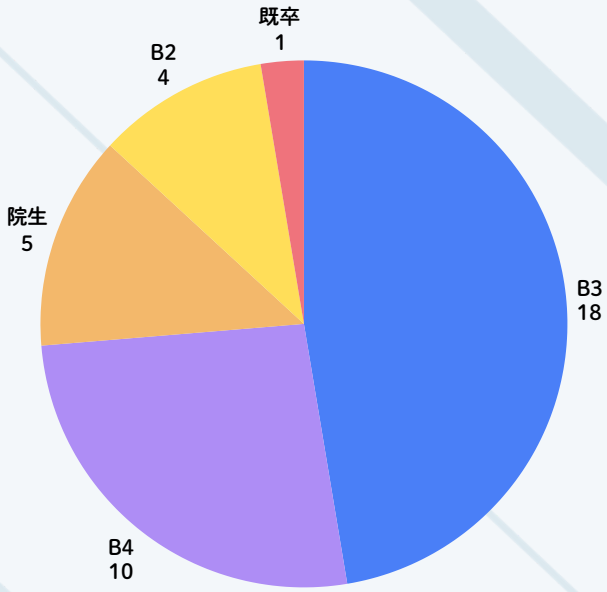
外務省を志した時期



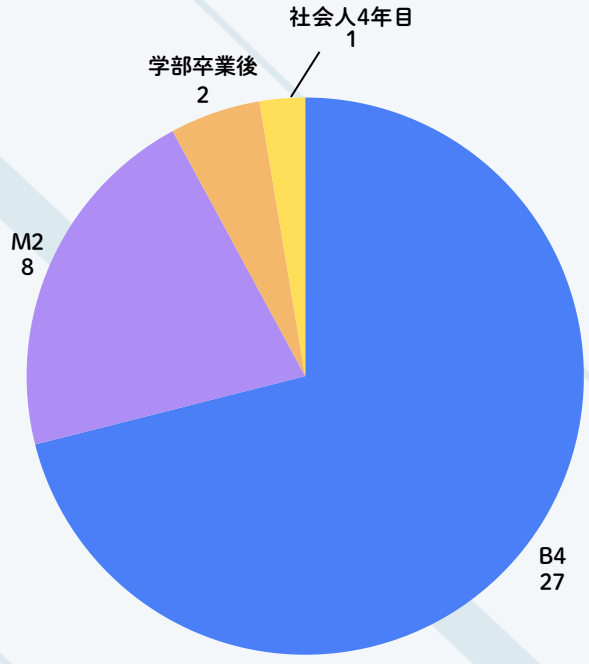
公務員試験 受験区分



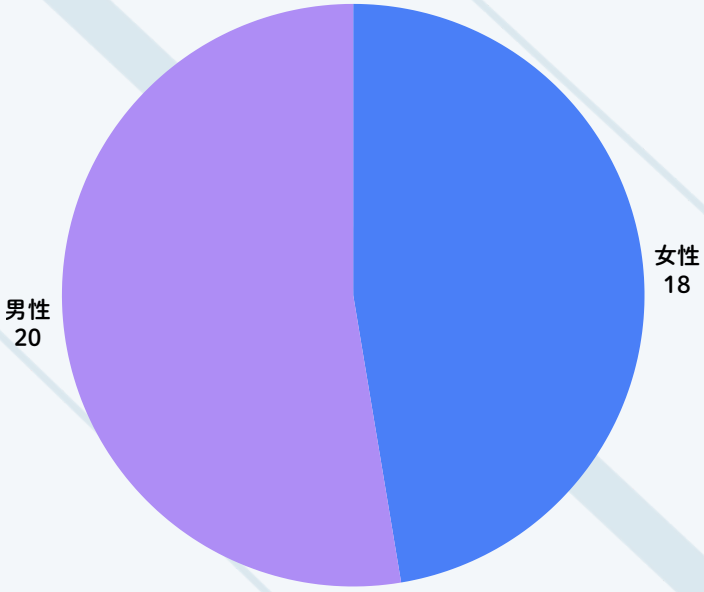
公務員試験受験時の学年



官庁訪問時の学年

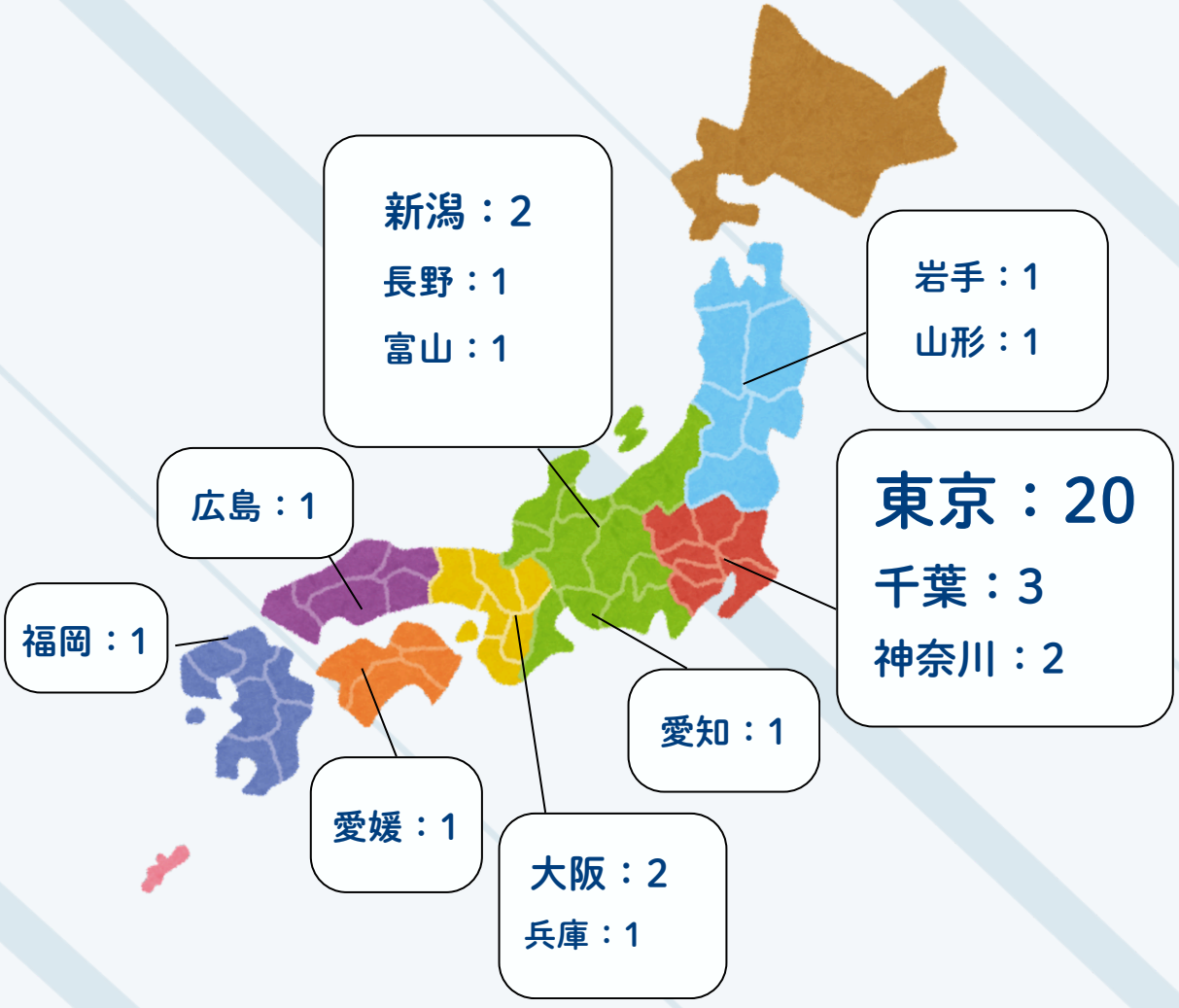


性別


女性
18
男性
20



出身地


新潟：2
長野：1
富山：1
岩手：1
山形：1
広島：1
東京：20
千葉：3
神奈川：2
福岡：1
愛知：1
愛媛：1
大阪：2
兵庫：1

02.公務員試験対策

1.教養区分

体験記１：教養区分

2.政治国際人文区分

体験記２：政治国際人文区分

3.院卒(行政)区分

体験記３：院卒（行政）区分

国家公務員総合職試験は、官僚になる道の第一歩であり、様々な背景や専門性を持つ人に開かれています。

ここでは、内定者の受験事情や勉強方法を、体験談を交えて詳細にご紹介します。
自身に合う試験区分の選択や、試験対策の参考になれば幸いです。

1．教養区分概要

基礎情報

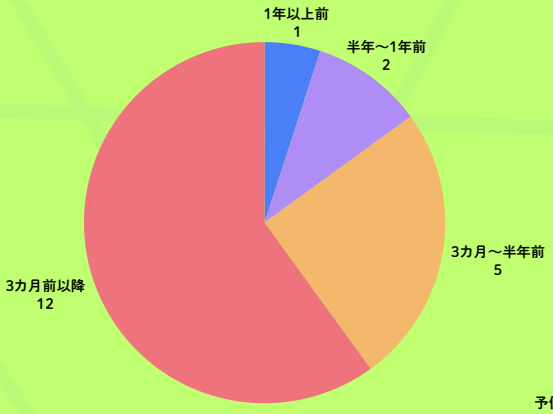
以下は、教養区分試験の概要（2026年10月時点）です。
スケジュールは2026（令和8）年度秋の教養区分および2027（令和9）年度春の教養区分に関するものです。春試験に関しては2027年度より日程が前倒しされることが発表されていますが、まだ詳細な日程は発表されておりません。詳しくは、人事院のホームページをご確認ください。
前年度から春試験の教養区分が新設されたほか、大学1年生から受験が可能になりました。

受付期間	申込みは、人事院ホームページより行うことができます。 2026（令和8）年度の秋試験の場合は、7月31日（金）9:00-8月24日（月）が受付期間でした。 2027（令和9）年度の春試験の場合は、1月下旬-2月上旬に予定されています。
第1次試験	2026（令和8）年度秋試験の場合は、2026年10月4日（日） 2027（令和9）年度春試験の場合は、2027年2月28日（日） 基礎能力試験と総合論文試験の2つの試験が実施されます。しかし、第1次試験の合否に関係するのは基礎能力試験のみです。 ⦿基礎能力試験（多肢選択式、配点:計4/24、配点計4-24） 公務員として必要な基礎的な能力について問う試験です。 Ⅰ部：知能分野（配点：2.5/24）2時間20分 ・判断推理・数的処理・資料解釈（14問） ・文章理解（10問） ・自然・人文・社会に関する時事・情報（6問） 幅広い分野の時事に関して問われます。 Ⅱ部：知識分野（20問、配点：1.5/24）1時間 自然・人文・社会（20問） ⦿総合論文試験（配点：6/24）2時間30分 政策立案の基礎となる教養・哲学的な考え方に関する問題が1題出題されます。
第1次試験合格者発表日	2026（令和8）年度秋試験の場合は、2026年10月21日（水）9:00 2027（令和9）年度春試験の場合は、2027年3月中旬に予定

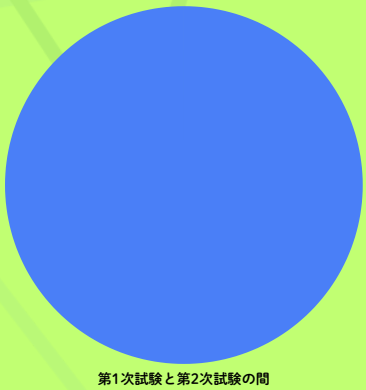
第2次試験	2026（令和8）年度秋試験の場合は、2026年11月24日（火）及び25日（水）または11月26日（木）及び27日（金）のいずれか、指定される連続する2日間 2027（令和9）年度春試験の場合は、2027年4月上旬から下旬を予定。 企画提案試験、政策課題討議試験、人物試験の3つの試験が2日間で行われます。 ⦿企画提案試験（配点：6/24）約2時間 第2次試験の1日目に行われる試験です。第1次試験後に参考資料が、試験当日に資料に関連する課題が提示されます。本番では課題を基に1時間半で課題への解決策を提案する資料を作成し、試験官へのプレゼン及び質疑応答を行う流れです。 ⦿政策課題討議試験（配点：4/24）約1時間30分 第2次試験の2日目に行われる、試験当日に発表される課題に基づいて20分程度でレジュメを作成し、そのレジュメをもとにグループ討議を行う試験です。 ⦿人物試験（配点：4/24） 第2次試験の2日目に行われる、事前に書いた面接カードを基に3人の面接官と対面で行う個別面接です。
最終合格者発表日	2026年度秋試験の場合は、2026年12月17日（木）9:00 2027年度春試験の場合は、5月下旬を予定。

データでみる内定者

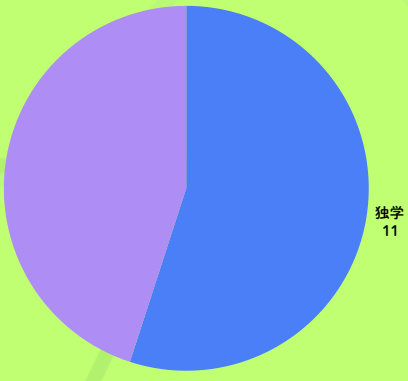
第１次試験勉強開始時期



第２次試験勉強開始時期



独学 OR 予備校





第１次試験対策

基礎能力試験

基礎能力試験は幅広い分野から出題されます。
基本的に過去問を用いて対策しつつ、苦手な部分や時事を補うために参考書を使って勉強している人が多くいました。それぞれが自分の苦手と得意を把握し、効率的に対策をしていました。大学受験時代の参考書を使用していた人も多いようです。

・過去問を解いた。
・フリマサイトで過去の受験者が使った教本を買い、大学受験時の教科書なども見つつ、過去問と往復した。
・数的処理をひたすら演習して解法と難問の捨て方を会得した。
・数的処理は、3か月前ほどから教養区分の過去問を毎日数問ずつ解くようにした。はじめは、時間を気にせず、正解にたどり着くまで試行錯誤して、自分なりのルーティーンを見つけるようにした（まずは表を書くとか、場合分けをする時の順番とか）。
・文章理解は、過去問を何回か解いた。他の科目は某予備校のウェブサイトに大学入試レベルの教科書の内容がまとまっており、それを利用した。
・文学部で法や経済に明るくなかったため、それらを重点的にインプットした。
・教養は範囲が広いので、必ず得点する分野（文系であれば文系科目全て）を決めて、そこはほぼ何を聞かれても答えられるぐらい極める。その他は、手持ちの問題集の内容だけ答えられるようにする。
・時事問題は得点源になると考え、市販の書籍やネット上の動画等を活用した。

総合論文試験

総合論文試験では、時間内に資料を読み、思考し、論文を書ききる力が求められます。知識のインプット、時間配分の練習をするとともに、先生、先輩、友人などに協力していただきながら対策をしている人が多かったです。

・過去問に目を通した。
・論文は友人と対策グループを作り、相互添削をおこなったほか、大学の対策コミュニティにも参加し先輩からアドバイスをもらった。
・書いたら必ず信用できる先生（厳しく指摘してくださる先生）に添削してもらう。
・総合論文は予備校の講座を聞き、抑えるべきポイントを学んだ上で3、4回ほど実際に書いて時間配分の感覚をつかんだ。
・予備校の講座を受け、総合論文を書く練習を重ねた。知識のインプットは予備校の映像授業とテキストを用い、国際関係、政治学、行政学を特に勉強した。





第２次試験対策

第２次試験は、そのすべてが他者とのコミュニケーションが求められる試験であるため、予備校、先生、先輩、友人と協力しながら、練習を重ねている人が多かったです。特に、予備校、または各大学のキャリアセンターやコミュニティで開催されていた対策会に出席したという声が多く見られました。

第２次試験全体

・他省庁、大学で開催される対策会に参加したり、知り合いの先輩に見ていただいた。
・いずれも、友人や予備校、大学のキャリアセンターなどで実践練習の数をこなす。
・勉強会を開いてくれる団体があれば、そこに参加する。
・新聞や白書、省庁のHPを見て、時事ニュースの情報集めや専門家の視座を学んだ。

企画提案試験

・自分なりにメモをとりながら白書を読み込み、関連する書籍に目を通した。
・白書の該当箇所を読み込み、コアイシューマップを作成し、課題を整理した。ステークホルダーマップを作成し、どんなアクターが関与しうるのか整理した。
・政策のタマを8個くらい作って友人と見せあったりした。実際の企画提案でどういう構成にするかなどについても、先輩のものを参考にさせてもらった。
・当日出題されそうな内容を推測した上で提案する政策を3つほど準備し、プレゼンスライドにまとめて友人のフィードバックをもらった。
・省庁のインターンで知り合った同じ公務員志望の友人と、政策の案を練る会議をした。先輩に、および予備校で添削をしてもらった。
・AIに壁打ちをした。

政策課題討議

・公務員志望者のサークルで模擬討議を行い、試験官役の内定者の先輩からフィードバックをもらった。
・予備校の模擬討議を利用した。一度予備校の対策会で練習した。
・大学の公務員志望コミュニティを利用して、先輩方に政策討議を見ていただいた。
・所定の時間でレジュメを書き切る練習を何度かした。

第２次試験対策（続）

人事院面接

・自分で納得できる一貫した志望理由ストーリーが伝わる面接カード作りを意識した。
・人物試験については、面接カードをなるべく早めに書き始め（1次試験終了後）、複数の友人や先輩に添削してもらったのが、非常に役立った。
・大学のキャリアセンターで面接カードの添削と面接練習を行ってもらった。
・予備校の模擬面接を利用した。何回か練習した。
・先輩に模擬面接をしてもらった。厚労省の二次試験対策イベントで模擬面接をしてもらった。

なぜ教養区分を受験したのか

区分を選ぶときには、大学での自分の専攻、大学以前に勉強してきたこと、自分の得意不得意、受験時期、民間就活や旅行などのイベントとの兼ね合いなど、様々なことを考えていたようです。

・大学の専攻がいずれの専門区分とも関係が薄かったため、範囲は広いが専門性は求められない教養が最も効率よく合格できる試験区分だと考えたため。
・時期がちょうど良かった上に、専門が人文系で他の試験区分では受験しにくかったから。
・下級生から受験できるから。
・周りの先輩の多くが教養区分を受けていたため。
・共通テストに近いと思ったから。
・大学受験の知識で、ある程度対策可能だと思ったから。
・そこまで自信がない法律区分や政治国際人文区分よりも、教養区分の方が対策をしやすい（知識をたくさん詰め込むよりも、論文の書き方を覚えられれば突破しやすいと感じた）と考えたから。
・始めから外務省志望だったため、外務省の内定者に教養区分が多いという事実を把握しており、当時は教養区分のほうが採用に有利なのではないかと思っていたため。
・公務員を志したのが大学3年の秋で、次の年の秋の試験を受けるのが最もタイミングが良いと考えたから。
・秋に合格すれば時間に余裕ができるため、民間就活や官庁訪問対策に時間を有効活用できると思ったから。
・民間就活も視野に入れ、心の余裕を持つために秋の教養区分の合格を目指した。
・秋に受かっておいた方が、春に民間就活がしやすくなったり、同期の卒業旅行に参加しやすくなると考えたため。
・チャンスが1回限りなのは難しいので、まずは秋に教養区分を受けて、結果次第で春に政治国際人文区分を受けようと考えたから。

体験記１：教養区分



名前：U

専攻：国際関係論

備考：座右の銘は「過ぎたるは猶及ばざるが如し」

この区分を選んだ理由

秋に受験できる試験であったため、ひとまず教養区分を受験してから、合格すればそのまま、できなければ春の政治国際人文区分を受験しようと考えていました。教養区分は厄介な算数の問題などが含まれていて、対策のしづらい試験だと聞いていたので、嫌だなぁと思いながらひとまず受験したことを覚えています。

基礎能力試験対策

第1次試験は、算数のような数的処理と日英の文章読解に関する文章理解の2パートからなります。このうち、文章理解はなるべくミスなく解答する必要があるでしょうが、英語の読解以外に特段対策できるものはないように思います。直前に過去問を解いて雰囲気を理解しておけば十分でしょう。

他方、数的処理は多くの人にとって1次試験の最難関だろうと思います。私は試験3ヶ月前ほどから教養区分の過去問を毎日少しずつでも解くようにしました。最初にいくつかの数値例を試してみるとか、手近な場合を数えてみるとか、難しい問題が来ても焦らずにとりあえず手始めにやるルーティーンを、自分なりに確立していくのが役立ちます（全部解けないと受からない試験ではないので、初めの頃は時間はあまり気にせず）。

総合論文試験対策

総合論文試験にどのような論点が出題されるかを予測することは困難です。したがって、過去問を事前に3年分ほど解いて、フォーマットに慣れておくこと、特に資料から出題者が意図している論点を見出して文中で引用する方法に慣れておくことが肝要だと思います。
自分も、1週間ほど前に、教養区分の過去問を3年分解いた記憶があります。

第２次試験対策

2次試験は、事前に発表されたテーマに関して政策提案をプレゼンをする企画提案試験、当日に発表されたテーマについて討論する集団討議試験、一般的な面接である人物試験に分かれます。

このうち、最も対策に時間をかけたのは企画提案試験だったと記憶しています。課題となる白書が発表された後、一通り目を通して重要そうな論点を整理したうえで、関連する書籍を何冊か読みました。自分の時のテーマはこども子育て政策についてで、それまでの関心や志望していた外務省の業務内容に直接関係するものではありませんでしたが、いざ考えてみると当然難しくも興味深いテーマで、（外交・安全保障政策を超えた）公共政策全般に関わる職業人生へのモチベーションを高めるきっかけになったと思います。

反省点

振り返ってみると、あまり気負いすぎないということが最大の教訓ではないかと思います。教養区分試験は、もちろん上記のようにできる対策はあれど、当日の問題との相性等に結果が左右されやすく、どれだけ優秀であったり努力をしたりしても結果に恵まれないことが往々にしてある試験です。受験当時もそのことをよく理解していたつもりでしたが、逆に対策甲斐の無さにとても不安になったことを覚えています。

しかし、このことは逆に考えれば、とりあえず受けてみて、結果次第で次にどうするかを考えるしかない、ということでもあります。区分と採用は全く関係がないように見えますので、やるだけやってみて、あとは成り行きに任せるというくらいの緩やかな気概でいることが大事です。試験勉強に圧倒されるのではなく、あくまで自分の思い描く職業人生に至るためにやらざるを得ない仕事位に思って、気楽に臨むのが良いと思います。

メッセージ

大学3年生で職業選択について悩んでいた際、マックス・ヴェーバー『職業としての学問』を読んで非常に感銘を受けました。これは、第1次大戦末期、戦況が悪化し社会不安が高まる中、自分たちを導いてくれる指針を学者に求める学生たちを前に、ヴェーバーが語った講演内容をまとめた本です。ヴェーバーは、学者の仕事は唯一の正義を語るものではなく、世の中に存在し互いに対立する様々な正義・価値観を総覧して、その諸相を論理的に分析することだ、人生の指針を求めるならば、学者に教えを求めるのではなく職につけ、と述べます（少なくとも私はそう読みました）。すなわち、それぞれの職業ごとに社会を見る視角とそれによって規定される正義があって、その中に学者が見出せるような唯一の正義など存在しないこと、そしていずれかの正義を自らの人生の信念として生きるためには、その職業を選択して働くしかないことを、彼は学生たちに伝えようとしたのです。

これを読んで、公務員になるか大学院に進むか悩んでいた私は、たとえ外交官や国家公務員から見える正義や「国益」がある種の偏狭さを免れないとしても、ほかに並び立つ様々な職業と比較して、この仕事は自分が目指す職業倫理のあり方を体現するものであり、自らの人生を賭してその中から見える正義を追求したいと思うようになりました。このような意味での誇り（と諦念）をもって職業選択をしたことは、今でも良かったと思っています。読んでくださった誰か一人にでも（単なる試験勉強を超えた）職業選択の一助になってくれることを願っています。

コラム：教養区分再チャレンジ



名前：Y

◆教養区分を選んだ理由と、初挑戦での学び

２年生秋に教養区分で一次不合格となり、翌年再挑戦して合格しました。一発で合格する自信がなかったため、2年生から挑戦できるならまずどのような試験かを知ろうと受験しました。2年の夏休みは苦手だった数的処理を重点的に勉強しましたが、実際の受験では知識分野の方が致命的だったと判明しました。総合論文では4時間座りっぱなしだったことで腰を痛め、知力・体力ともにまだまだ不十分だと自覚しました。一方で、試験全体のイメージを掴み、何を準備すべきか分かったのは大きな収穫でした。① 基礎能力Ⅱは範囲が広く、全て真面目にやろうとすると安定して得点できない、② 予備校の総合論文の添削が甘く、自身の論文力に確信を持てなかった、③ 数的処理の基礎力が足りていない、が反省点でした。

◆二度目の挑戦

３年生の春も細々と数的処理や知能分野Ⅱの勉強を続けていたのですが、本格的にギアをあげたのが8月でした。昨年の反省から、基礎能力試験に関しては、文系であることを考慮し、人文科学、社会科学、地理、時事が安定して得点源となるよう的を絞りました。テキストで分かった苦手分野や、過去問・問題集で間違えた情報を一覧にまとめて、試験直前に見返す資料を作りました。

9月初めの時点で、数的処理のセンスがないと悟ったので数的処理は潔く諦め、基礎能力Ⅰは文章理解で満点をとることとし、努力の分だけ実を結ぶ基礎能力Ⅱに全振りしました。総合論文は、厳しく添削してくれそうな先生に過去５年分の添削をしていただきました。一次合格後は、二次対策から官庁訪問まで同じ先生に対策していただきなんとか合格まで漕ぎ着けることができました。

ちなみに、数的処理は案の定、本番では破滅的な点数となりました。その他は作戦通り得点でき、一次はギリギリ合格。本番に苦手分野で大事故を起こしても、他の分野でカバーできるよう勉強したのが功を奏したかなと思います。とはいえ最終合格の鍵を握るのは得点配分上、総合論文なので、そこも手を抜かずに頑張りました。

◆総括・メッセージ

自分の現時点での能力と向き合った上で合格から逆算し、戦略的に勉強したことが合格につながったのだと思います。周りには本当に優秀な人もたくさんおり、必要な勉強時間も人それぞれです。今はまだ自分に自信がなくとも、いつかそういう人たちと肩を並べられるような日が来ることを願うのなら、自分も何とかしてそこに到達したいという思いでぜひ勉強してほしいと思います。私は、教養区分の難易度の高さと範囲の広さに圧倒されてしまったときには、数年前の内定者ノートに書かれていた「できるまでやれる気合いと胆力さえあれば、誰でもなんとかなります。」という言葉を思い出し、気合いを入れ直していました。

教養区分は「運ゲー」「大学受験までのストックに左右される」と言われることもあります。私は共通テストを受けたこともなく、中高の半分ほど海外だったので、日本史をはじめ、日本の義務教育範囲の知識が怪しいところがありました。だからこそ、教養区分の勉強を通じてひとつずつ穴を埋められたのは幸いでしたし、こんな私でも合格できたので、もし、どうしても国家総合職に合格したいという意思をすでにお持ちなら、チャンスの多い教養区分を受けない手はありません。ぜひ検討してみてください。応援しています！

2. 政治国際人文区分

基礎情報

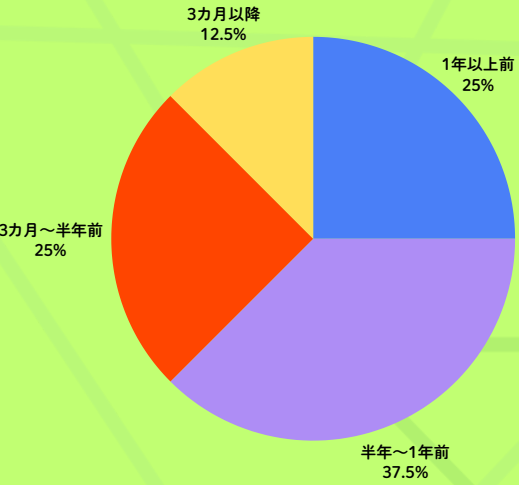
以下は、政治国際人文区分の概要（2026年10月時点）です。
2027年度から国家総合職春試験のスケジュールが昨年よりも約1カ月前倒しされるため、スケジュールに関しては昨年度実施分の情報ではなく、2026年10月4日時点判明分のスケジュールを掲載しています。また、試験の情報に関しては、2026年度春試験要項を参照しています。
詳しい情報は、人事院のホームページをご確認ください。

受付期間	申込みは、人事院ホームページより行うことができます。 2027（令和9）年度の場合は、1月下旬 ～ 2月上旬に予定されています。
第1次試験	2027（令和9）年度の場合は、2027年2月28日（日）を予定。 ◉基礎能力試験（多肢選択式、配点：2/15）2時間20分 〇知能分野（24問） ・文章理解（10問） ・判断推理/数的処理/資料解釈（14問） 〇知識分野 ・自然/人文/社会に関する時事、情報（6問） ◉専門試験（多肢選択式、40問、配点：3/15）3時間30分 次のコースA、Bからいずれかを選択し解答 〔コースA　政治・国際系〕55題出題 40題解答 〇必須問題 政治学⑩、国際関係⑩、憲法⑤の計25題 〇選択問題 行政学⑤、国際事情③、国際法⑤、行政法⑤、民法（担保物権、親族及び相続を除く。）③、経済学③、財政学③、経済政策③の30題から任意の計15題解答 〔コースB　人文系〕55題出題 40題解答 〇必須問題 政治学・国際関係・憲法⑤、思想・哲学④、歴史学④、文学・ 芸術③、人文地理学・文化人類学②、心理学①、教育学③、社会学③の計25題 〇選択問題 思想・哲学⑥、歴史学⑥、文学・芸術⑥、人文地理学・文化人類学②、心理学③、教育学③、社会学④の30題から任意の計15題解答
第1次試験合格者発表日	2027（令和9）年度の場合は、2027年3月中旬を予定。

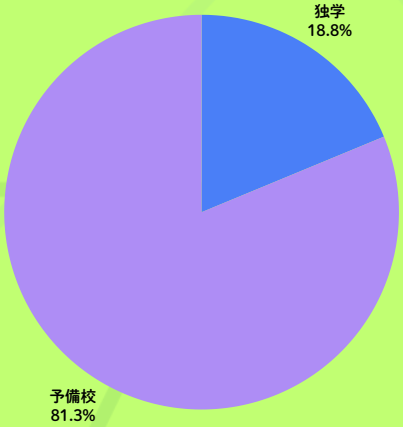
第2次試験	2027（令和9）年度の場合は、2027年3月21日（日）を予定。 ⦿専門試験（記述式、配点：5/15） 〇選択問題：次のコースA、Bからいずれかを選択し解答 〔コースA　政治・国際系〕 次の6科目8題から2題選択 政治学①、行政学①、憲法①、国際関係②、国際法①、公共政策② 〔コースB　人文系〕 次の3科目6題から2題選択 思想・哲学②、歴史学②、文学・芸術② （注）コースA、Bともに同じ科目から2題選択可。 ⦿政策論文試験（配点：2/15）3時間 政策の企画立案に必要な能力その他総合的な判断力及び思考力についての筆記試験1題。
人物試験	2027（令和9）年度の場合は4月上旬から下旬に実施予定。 第2次試験通知書で指定する日時で受験（日時の変更は原則として認められないので注意）。 ⦿人物試験（配点：3/15） 人柄、対人能力などについての個別面接。事前に人事院が提示する面接カードを記入し、持参する必要があります。
最終合格者発表日	2027（令和9）年度の場合は、2027年5月下旬を予定。

データでみる内定者

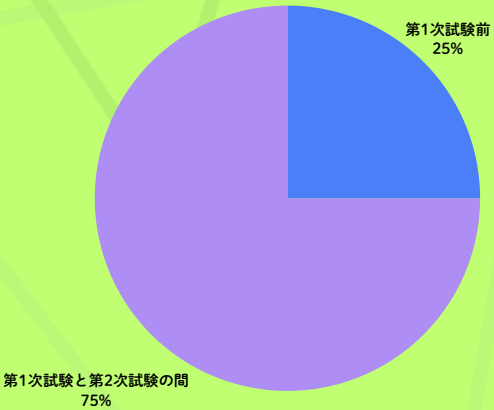
第１次試験勉強開始時期



独学 OR 予備校



第２次試験勉強開始時期





第１次試験対策

基本的に過去問を使いながら演習している人が多かったです。予備校に通っている人は予備校のテキストや講義を、独学の人はそれぞれに合ったテキストを使いながら、自分の状況に合わせて勉強していたようです。

・過去問を解いた。
・参考書は3周くらいして初学の分野を詰め込んだ。基礎能力試験は数的処理を早く解くのが苦手だったので、まずゆっくり解いて解けることを確認してから、早く解くためのポイントを自分で振り返って見つけていった。
・数的処理や文章理解などはまず初めに過去問を1周して感触を確かめた後、苦手な分野に絞って問題集を解いた。その後は憲法や行政学などの暗記科目を重点的に勉強した。知らないと解けない科目を潰していくイメージで勉強していた。
・ひたすら反復！政治学や行政学、国際関係を得意科目にできるように色々な問題の演習を繰り返した。
・予備校の動画とテキストを活用した。
・「独学」ではあったが、先輩から拝借した予備校の問題集、参考書を何周もした。過去問を中心にどの分野が出やすいかを意識した。
・知識をインプットすることと、問題演習を通してアウトプットすることの双方をバランスよく行うよう意識していた。

第２次試験対策

記述問題や面接であるため、友人などを頼って対策した人が多くいました。また、とにかく練習回数を重ねることで対策をしていたようです。

専門試験（記述）

・過去問5年分を解いた。
・とにかく過去問を手書きで書き、早く書く練習をした。
・1次試験と同じく先輩から拝借した予備校の問題集、参考書を何周もした。過去問を中心にどの分野が出やすいかを意識し、出やすそうな論点を複数挙げて論述できるように準備しておいた。
・予備校のテキストで答えを確認した。
・予備校の添削指導を受け、独学で過去10年に出題されたテーマ・模範解答をまとめた。

第２次試験対策（続）

政策論文

・予備校で添削を受けた。
・政策論文は日本語でのエッセイライティングに慣れていればあまり困らないと思う。とはいえ、不安は尽きなかったので、すでに試験に合格している友人に添削をお願いして書き方を学んだ。
・政策論文は、論理的であることと減点要素を無くすことを重視した。
・専門択一のうち、回答予定の筆記問題分野に関わる基礎知識を洗い直していた。過去の模範解答を読み込んだ。
・論文は、過去問を解きながら、知識を整理し直す、を繰り返した。

人物試験

・予備校の先生などと面接練習・面接カード添削を受けた。
・人物試験は、論理的であること、一貫性があることを重視した。
・何度も練習した。
・模擬面接をしてもらう。
・人物試験は民間就活に力を入れていたため、特に対策しなかった。

なぜ政治国際人文区分を受験したのか

・夏に受験を決めて教養区分を受けたものの１次試験で不合格。幅広い分野を問われるため短期間での対策は難しく、準備が足りなかった。もう諦めて民間に行こうかと思っていた頃、「専門区分では自分が大学で身につけてきた特定分野に集中して対策できるため、独学でも成果が出るはずだ」と助言され、政治国際人文区分での受験を決めた。
・大学受験を経験していないため教養区分は不利だと思った。官庁訪問にも活きる知識を身につけられると思った。
・もともと国際関係、国際政治、行政学に関心があったから。
・もともと国際政治を専攻していたこともあって、楽しみながら勉強できそうだと感じたから。
・政治学（国際関係）専攻のため、なじみのある科目が多かったから。
・政治国際人文区分が自分にとってより取り組みやすいと考えたから。
・外交につながるような知識を身につけながら試験勉強もできることが魅力的で選んだ。

体験記２：政治国際人文区分



名前：N

専攻：法学

備考：写真はアルバイト先の忍者カフェ

この区分を選んだ理由

大学で国際関係や日本政治外交史を学んでおり、自分の関心と大学での勉強を最も生かせる区分だと考えたためです。法学部に所属していたため法律区分も選択肢ではありましたが、興味を持って勉強を続けられることを重視し、政治国際区分を選びました。

また、政治学や国際関係、国際法などは、試験対策にとどまらず、今後外交に携わる上での基礎にもなると考えました。普段関心を持っている国際情勢を、改めて理論や歴史に照らして理解できる点も魅力に感じました。

専門試験対策

先輩からもらった予備校のテキストや問題集を中心に対策しました。まず過去問から出題形式や問われる知識の深さを確認した上で、必要な範囲・科目ごとに出題されやすい分野を重点的に学習しました。憲法・行政法は判例を、政治学・国際関係・行政学は人名や用語、学説を中心に覚えました。

特に政治学や国際関係、行政学では、人名と用語を個別に暗記するだけでは混同しやすいため、学説の違いや歴史的背景、時系列を関連づけて整理しました。大学で学んだ内容も含め、試験で問われる形で知識を取り出せるようにするのを心掛けました。

１次試験では、「科目ごとに教科書、参考書でインプット→過去問を解く→解説とテキストで確認する→1,2日空けて、間違えた問題を解き直す」という流れを短いスパンで何回も（1科目1週間で2,3周）繰り返しました。各選択肢のどこがどう誤りか説明できるように意識しました。

２次試験の記述対策では、覚えた知識を設問に応じて組み立てる練習、論述上の「構成」を重視しました。過去問を用いて盛り込むべき論点や具体例を箇条書きし、論理関係を矢印で示すメモを作り、答案の構成を考えました。その後、教材の解答例と照らし合わせ、論点の抜けや説明不足を確認しました。模範解答の文章そのものよりも、「なぜこの順序で説明するのか」、「どの概念が解答の中心になるのか」を理解するようにしました。また、試験前には頻出論点集を自作し、繰り返し読み返しました。

政策論文試験対策

過去問と解答例を使い、設問の要求と資料の内容を踏まえた答案を作る練習をしました。特に、用意していた知識や主張を一方的に書くのではなく、与えられた資料から何が読み取れ、それが自分の議論とどうつながるのかを明確にすることを意識しました。

答案作成では、課題とその背景を整理し、対応策を示した上で、その実施に伴う問題点や限界にも触れるようにしました。政策を提案する場合も、単に「この施策が必要だ」と述べるだけでなく、誰が、どのように実施するのか、どのような効果が期待できるのかまで考えるようにしました。また、なるべく相手に伝わりやすい文章を心がけ、特に、内容の重複を避け、論理関係の省略をしすぎないように気をつけました。

時間が限られているときには、全文を書く代わりに構成を作る練習も取り入れました。ただし、構成を考えることと制限時間内に答案を書き上げることは異なるため、実際に時間を計って書き、資料の読解、構成検討、答案作成にどれくらい時間がかかるかの感覚を養うことも大切だと思います。

人物試験対策

「なぜ国家公務員か」「なぜ総合職か」を自分の言葉で説明できるようにすることを重視しました。外務省への志望理由だけでは、国家公務員としてどのような日本を実現し、どう社会に貢献したいのかが十分に伝わらないと考えたからです。

面接カードに記載する経験は、活動の内容や成果だけでなく、そのときの課題、自分が考えたこと、実際に取った行動、そこから学んだことを整理しました。特に、集団としての成果と、その中で自分が果たした役割を区別して説明できるように準備しました。

また、想定質問への回答を考え、声に出して説明する練習をしました。回答を一字一句暗記するよりも、伝えたい要点を整理し、質問に応じて簡潔に答えられるようにすることを意識しました。立派に聞こえる表現を探すより、等身大の自分を自分だけの言葉で表現し、経験と志望理由が自然につながるように意識しました。

反省点

試験対策を始めたのがギリギリになってしまったことです。「大学の勉強をしっかりやっておけば政治国際区分はそんなに勉強しなくても余裕」という出典不明な噂（まじでそんなことないです。ちゃんと勉強してください。）を鵜呑みにして、年明けまで過去問すら確認しませんでした。その結果、試験直前は高校/大学受験以上にプレッシャーのかかる中、追い込みをかける必要に迫られました。

１次試験の対策ではインプットとアウトプットをほぼ同時にする羽目になり、２次試験を見据えた準備が後回しになりました。専門科目を学ぶ段階から、重要な概念を短い文章で説明するなど、記述につながる勉強をしておけばより効率的だったと思います。独学では進度を自分で管理する必要があるため、その日の気分や得意不得意によって、学習内容に偏りが出やすい点も課題でした。残り時間と教材の分量を把握し、週単位で目標と進捗を確認する仕組みを早くから作っておけばよかったと思います。

メッセージ

政治国際区分の勉強は、日々のニュースや外交上の課題を深く理解することにつながり、自分の関心や将来取り組みたい業務内容と結びつけると、モチベーションになると思います。しかし、就職活動を終えた友人の姿や試験対策で周囲の進み具合を見て、自分の選んだ道に不安を覚えることもあるかもしれません。そんなときこそ、なぜこの仕事を志したのか、その原点に立ち返ってみてください。

私にとっての原点は、夏目漱石の『私の個人主義』と内村鑑三の『後世への最大遺物』でした。漱石からは、自分自身の足場を見つけ、その選択に責任を持つことを、内村からは、功績の大小にかかわらず、生き方そのものが後世に遺すものになり得ることを学びました。そこから、自分が納得して引き受けられる仕事は何か、その仕事を通じて何を遺したいのかを考えるようになりました。

この問いを具体的な職業選択に結びつけてくれたのが、採用担当の方の「形容詞ではなく動詞を重視する」という助言です。仕事への憧れを、日々の業務に置き換える。相手の話を聴き、日本の立場を説明し、利害が対立しても合意を探り、言葉を駆使して歴史を紡いでいく。私は、そうした営みに粘り強く携わりたいと考えました。その難しさは、まだ自分には分かりません。それでも、不断の研鑽を積み、人生を懸けて臨みたいと思える仕事を、自分なりの理由で選べたことは大切にしたいと思います。

自分はこの仕事を通じて何をしたいのか。その答えは、今から完成していなくてもよいと思います。自分の言葉で確かめた理由が、目の前の一問に取り組む支えになるはずです。皆さまがご自身の選択を大切にしながら、納得のいく形で本番を迎えられることを願っています。



3. 院卒（行政）区分

基礎情報

以下は、院卒（行政）区分試験の概要（2026年10月時点）です。
2027年度から国家総合職春試験のスケジュールが昨年よりも約1か月前倒しされるため、スケジュールに関しては昨年度実施分の情報ではなく、2026年10月4日時点判明分のスケジュールを掲載しています。また、試験の情報に関しては、2026年度春試験要項を参照しています。
詳しい情報については、人事院のホームページをご確認ください。

受付期間	申込みは、人事院ホームページより行うことができます。 2027（令和9）年度の場合は、1月下旬-2月上旬に予定されています。
第1次試験	2027（令和9）年度の場合は、 2月28日（日）を予定。 ⦿基礎能力試験（多肢選択式、30問、配点：2/15）2時間20分 〇知能分野（24問）　・文章理解（10問）　・判断推理/数的処理/資料解釈（14問） 〇知識分野　・自然/人文/社会に関する時事、情報（6問） ⦿専門試験（多肢選択式、40問、配点：3/15）3時間30分　※（）内は問題数 次の選択Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳからいずれかを選択し解答 〔選択Ⅰ　政治・国際系〕55題出題 40題解答 〇必須問題：政治学⑩、国際関係⑩、憲法⑤の計25題 〇選択問題：行政学⑤、国際事情③、国際法⑤、行政法⑤、民法（担保物権、親族及び相続を除く。）③、経済学③、財政学③、経済政策③の30題から任意の計15題解答 〔選択Ⅱ 人文系〕55題出題 40題解答 〇必須問題：政治学・国際関係・憲法⑤、思想・哲学④、歴史学④、文学・芸術③、人文地理学・文化人類学②、心理学①、教育学③、社会学③の計25題 〇選択問題：思想・哲学⑥、歴史学⑥、文学・芸術⑥、人文地理学・文化人類学②、心理学③、教育学③、社会学④の30題から任意の計15題解答 〔選択Ⅲ 法律系〕49題出題 40題解答 〇必須問題：憲法⑦、行政法⑫、民法⑫の計31題 〇選択問題：商法③、刑法③、労働法③、国際法③、経済学・財政学⑥の18題から任意の計9題解答 〔選択Ⅳ　経済系〕46題出題 40題解答 〇必須問題：経済理論⑯、財政学・経済政策⑤、経済事情⑤、統計学・計量経済学⑤の計31題 〇選択問題：経済史・経済事情③、国際経済学③、経営学③、憲法③、民法（担保物権、親族及び相続を除く。）③の15題から任意の計9題解答
第1次試験合格者発表日	2027（令和9）年度の場合は、2027年3月中旬を予定。

第2次試験（筆記）	2027（令和9）年度の場合は、2027年3月21日（日）を予定。 ⦿専門試験（記述式、配点：5/15）3時間 〇選択問題 2題 次の17科目22題から2題選択 政治学①、行政学①、国際関係②、思想・哲学②、歴史学②、文学・芸術②、公共政策②、憲法①、行政法①、民法①、商法①、刑法①、民事訴訟法①、国際法①、経済理論①、財政学①、経済政策① （注）同じ科目から2題選択可。 ⦿政策課題討議試験（配点：2/15）おおむね1時間30分 課題に対するグループ討議によるプレゼンテーション能力やコミュニケーション力などについての試験。
人物試験	2027（令和9）年度の場合は4月上旬から下旬に実施予定。 第2次試験通知書で指定する日時で受験（日時の変更は原則として認められないので注意）。 ⦿人物試験（配点：3/15） 人柄、対人能力などについての個別面接。事前に人事院が提示する面接カードを記入し、持参する必要があります。
最終合格者発表日	2027（令和9）年度の場合は、2027年5月下旬を予定。

内定者（2名）アンケート結果

〈勉強スタイルについて〉
・第1次試験勉強開始は、3カ月前から
・第2次試験勉強開始は、第1次と第2次のあいだ
・勉強スタイルは独学
という方が多数派という結果になりました！

〈なぜ院卒区分に？〉
・院卒でかつ倍率が低かったため。
・院生だったから。

〈第1次試験の対策〉
・過去問、参考書、時事問題対策本を使いました。

〈第2次試験の対策〉
・過去問、論文はAIに添削をお願いしていました。
・理論は有斐閣の政治学・国際政治学でインプットました。
・直前に過去問を解いてみたりしました。

体験記３：院卒（行政）区分



名前：I

専攻：公共政策

備考：座右の銘は「史を以て鑑と為す」

この区分を選んだ理由

学部の時は国家公務員になろうとは考えていませんでした。大学院に進学することが決まってから、歴史に携わる外交官になりたいな、と考え始めたので院卒区分で受験しました。院卒区分は比較的合格率が高いといわれているため、大学院生は院卒区分で受験するといいかもしれません。区分で採用が左右されることはないように思います。

専門試験

17科目22題から2題を選択して解答する形式です。私は憲法と国際法を選択しました。

大学院の入試で選択した科目だったので、過去問を解いたり、院試問題を復習したりしました。試験の問題を渡されてから試験科目を選択することができるため、もし試験中に解けそうにないと思ったら、別の専門科目を解いても問題はないようです。戦略的撤退もありだと思います。

政策課題討議

最初に試験官から政策課題を配布され、考える時間が与えられます。

その後、別室に案内され、6人ぐらいでグループディスカッションをします。自分の意見を主張しつつも、他のメンバーの意見も聞き入れて、議論がまとまるようにもっていくのが難しいところだと思います。友人と模擬政策討議をやってみてもいいかもしれません。日頃からさまざまなニュースを見て、知見を広げておくことも大切だと思います。

人物試験

３人の面接官の前で自分の経歴や志望動機について面接カードに基づいて聞かれました。面接カードに記入したことは自分の言葉でありのままに説明することが求められました。面接官の目をきちんと見つめながら、できるだけ簡潔にわかりやすく説明できるようにしておくのがよいと思います。

反省点

彼を知り己を知れば百戦危うからず、と言いますが、私は自分の実情はある程度把握していたものの、国家総合職試験の実情をあまり把握できていませんでした。特に専門科目試験については、過去問に取りかかるのが直前になってしまい、とても焦る結果となりました。試験対策に割ける時間や体力といったリソースには限りがあります。

だからこそ、自分のリソースをどこに投下すべきかを見極め、戦略的に対策を進めることが不可欠かなと思います。専門科目の中で何を選ぶか、政策課題討議、人物試験はどういう内容か、きちんと正確に調べていれば対策もしやすいと思います。友人と相談しながら対策するのも効果的だと思います。

メッセージ

院卒区分で受験する方の中には、少し遠回りをしてきたことに引け目を感じている方がいらっしゃるかもしれません。かくいう私もこれまで遠回りをしてきました。最初から国家公務員を目指していたわけではありませんでした。大学院に進学する際に、もともと歴史書を読むのが好きだったこともあり、仕事をするなら歴史に携わることができる外交官になれたら、と考え始めました。やや遅い出発でした。

学部時代は、法学部に所属しながら2年留年し、その間には情報学の研究に取り組んだりしました。また、さまざまな国を旅したり、学生寮で友人と徹夜で麻雀に興じたりしたことも、今となってはよき思い出です。興味があることはできる限りやってみる、そんなスタンスで過ごしてきました。自分の得手不得手がある程度わかるようになりましたし、いろんな人と出会うこともできました。これは私のかけがえのない財産になりました。

一方で、失敗することも多く、自分は一体何をしているんだろう、と悩む日々も結構ありました。内定者ノートを読んでいる方の中には、留年を経験された方、社会人の方、就活で壁にぶつかっている方、あるいは、地方ならではの就活の大変さを感じている方など、様々なバックグラウンドを持つ方がいると思います。新しい道を選んだり、果敢に挑戦したりすれば、どうしても壁に突き当たったり、遠回りだと感じたりする瞬間が増えてしまいます。ただ、その時は局所的な最適解でなくとも、人生全体で見れば、大域的な最適解になっているかもしれません。自分に対して誠実であり続ければ、いつかそうした遠回りも自分の糧になると信じています。自分の経歴を語るのは私にとっては恥ずかしいことですが、ほんの少しでもみなさんの希望や安心に繋がれば幸いです。

03.官庁訪問対策

- 1.官庁訪問概要
- 2.持ち物
- 3.人事面接
- 4.業務説明
- 5.集団討論
- 6.印象に残っていること
- 7.外務省の決め手

約2週間にわたって行われる官庁訪問は、
各省庁における「採用面接」に近いものです。
ここでは、内定者が訪問期間中に意識したり、
考えたりしたことをご紹介することで、
リアルな外務省の官庁訪問をお伝えします。

１．官庁訪問概要

官庁訪問とは

国家公務員採用試験受験者が志望する府省庁を訪問し、職員から業務説明や面接を受けるもの。 訪問者にとって志望省庁に関する知識を深めるとともに、積極的に自己ＰＲできる機会であり、志望省庁に採用されるための重要なステップです。この仕組みを理解し、志望省庁から内々定および内定を得ましょう！

官庁訪問の仕組み

第1クール

第1クールはオンラインでも参加できます！
第1クールと第2クールは3日間ずつあります。

第2クール

第2クールでは、第1クールと同じ府省庁を訪問することができます。同一省庁への訪問は3日に1回までとなっています（土日を除き、翌日・翌々日の訪問不可）。基本的に第1クールと同じ省庁に同じ順番で訪問します。

第3クール

第3クールでは、前のクールの順番に関わらず、任意の府省庁を訪れることができます！

第4クール

最終日です。内々定が言い渡されます。

2026年のスケジュール

6月1日（月）午前9時から6月9日（火）午後5時までの、各省庁が定める期間中、開始日の午前8時以降の官庁訪問の予約を受付しています。

- 訪問開始：6月10日（水）午前8時以降
- 第1クール：6月10日（水）～6月12日（金）　（3日間）
- 第2クール：6月15日（月）～6月17日（水）　（3日間）
- 第3クール：6月18日（木）～6月19日（金）　（2日間）
- 第4クール：6月22日（月）　（1日間）
- 内々定解禁：6月22日（月）15時以降

※来年度の詳細なスケジュールなどの情報は人事院や各省庁の発表を参照。

各クールの流れ

クール	内容	詳細
第1クール & 第2クール 順不同	入口面談	1日の始めに行われる数分程度の簡単な面談です。1日の流れや疑問点を確認するもので、評価には関係ありません。 ※入口面談がない場合もあります。
	業務説明	業務をより深く知るためのもので、実際に職員を訪問し、話を伺うことができます。およそ 30 分 から 70分程度で、多くの場合1日に複数回あり、幅広く話を聞くことができます。
	人事面接	評価対象となる部分であり、1人あたりおよそ15〜20分で行われます。 基本的に学生1人に対して面接官1人で行われます。性格や価値観などのパーソナルな質問から外交政策まで幅広く質問されます。
	出口面談	1日の最後に行われる数分程度の簡単な面談です。人事課の人と1対1で行われ、その日の自分に対する評価ならびに次のクールに進めるかどうかを伝えられます。
第3クール 順不同	業務説明	第1,2クールと同様。
	集団討論	与えられたテーマに基づき、事前に資料を読んだ上で、賛成と反対の立場に分かれて討論します。討論の最後に1人1分ずつ自由に意見を述べる時間が与えられます。 討論自体は20分程度です。 ※6〜8人程度。討論とは別に、準備された資料を読み、整理する時間が15分程度与えられる。就活における一般的な「グループディスカッション」とは少し異なり、説得的な議論を展開できるかが問われる。
	出口面談	第1,2クールと同様。

2．持ち物

持って行ってよかったもの

エントリーシート(ES)類

- ESをコピーしたもの
- （ES内の項目のひとつである）「関心分野」で書いた地域についてのメモ
- ESについての補足をまとめたメモ

業務説明では、印刷したESを持ってお話を聞きに行きます。ESは字数が限られるので、ESを余分に印刷し、補足などを書き込んで持っていった人も。

ノート・メモ類

- 面接で気をつけたいことをまとめたメモ、「こう聞かれたらこう」という一問一答メモ
- 今までの説明会のまとめノート、就活で使ってきたノートやメモ【多数】
- 普段使っているメモ帳やノート、大きめのノート（「小さいと書きづらい」）
- パソコン（「より短い時間で面接の内容をメモできた」）【多数】

面接や業務説明でやり取りした内容を、待合室へ戻った後でメモにまとめている人が多い印象でした。また、これまで説明会などで書き溜めたメモ（ノート）を持って行った人も多かったようです。

お菓子・軽食類

- ゼリーなどの補食、どら焼き、ラムネ、飴等【多数】

（「空き時間や当日の空腹具合が事前に読めなかったなかで、適宜調節できた。」「自分の好物があるとやはり元気が出た。」）

官庁訪問は長丁場かつ、いつ面接に呼ばれるか分からないため、夜までお腹がもつように補食を持って行ってよかったという声が多数。一方、当日は待合室に、自由に食べて良いお菓子と飲み物が用意されていたため、「お菓子は要らなかったかも」という人も複数。

その他：目薬、腕時計、モバイルバッテリーがあるとよいという声も！

必要がなかったもの

なんと…本や教科書は意外と必要がないという声が挙がりました！

「色々と気になって本どころではなかった」
「周りの人とおしゃべりしていた」【多数】

持っていけばよかったと思うもの

- おしぼり
- 趣味にまつわる小物

「お守りとしても、ほかの志望者や職員と話すきっかけとしても役に立つかも」
当日、志望者はひとつの待合室に集められ、若手の職員が常駐して話し相手や面接への呼び出し役をしてくださいます。

- カードゲーム
- 名刺入れ

業務説明ではほぼ必ず名刺をいただきます。

持ち物にまつわるエピソード

- 水筒カバーから会話が生まれて少し緊張が和らいだ。
- 飴を持って行ったら他の志望者にも飴を持ってきた人たちがいて、待合室で交換会になって空気が和んだ。

何気なく持って行ったものから会話が生まれ、緊張がほぐれることもあるようです。



3．人事面接

人事面接で質問されたこと

志望理由について

- 志望理由について
- なぜ総合職なのか
- 平和や安保に興味があるなら防衛省でも良いのではないか
- ○○省を併願している理由はなにか
- 民間の他の志望先とはどこで繋がるか（どういう軸か）
- 志望言語の理由はなにか

自己PR

- 留学・部活動について
- リーダー経験・ガクチカについて

性格について

- 自分の弱みは
- 周りからどんな人だと言われるか
- 働く時にあなたはどんなタイプか
- 日頃コミュニケーションで工夫しいていることはあるか

時事や外交政策について

- 最近気になったニュース
- 日本の安全保障上の課題はなんだと思うか

＋その他昨今の国際情勢に絡めた質問など

その他

- 外務省を受験することに対する周囲の反応
- 大学で学んだこと（地域研究）を外務省での仕事にどう活かせると思うか
- （院卒だったため）学部時代は就活しなかったのか
- どんな職場で働きたいか
- 業務説明を経て働くイメージはできそうか
- 危険地に行く可能性があるがどう思うか

人事面接で意識したこと

- 相手が欲しい答えを瞬時に判断し、一球一球狙い撃ちすること
- 綿密に準備したことを落ち着いて答えること
- 少し考える時間をもらってでも誠実に答えること
- 落ち着いて、焦らずにしゃべること
- 面接官の目をとにかく見ること
- 笑顔でハキハキ喋ること
- 好青年と思ってもらえるようふるまうこと
- あくまで会話だという意識で臨むこと
- 等身大の自分を見せること
- 理路整然と話すこと
- 端的に答えること

ぜひ、ありのままの皆さんで臨んでください！



4．業務説明

業務説明の雰囲気



全体的な雰囲気

- 和やかで温かく、話しやすい雰囲気。緊張することなく、リラックスして話せることが多い。
- 明るく熱意のある職員が多く、「何でも聞いて！」と声をかけ、学生が話しやすいように配慮してくれる。
- 職員によって雰囲気は異なり、温かく親身な方もいれば、淡白な方もいる。

職員との対話の特徴

- 学生の意見や質問に真摯かつ丁寧に答えてくれた。説明もとてもわかりやすい。
- 学生の関心や興味を積極的に聞き、それに関連づけて担当業務や日頃の問題意識などを説明してくれる。
- 話を振ってくれたり、学生の意見を受け止めて議論を広げてくれたりする。
- 学生を試すような雰囲気はあまりなく、相互の対話を通じて業務への理解を深められる。

実施場所と環境

- 職員の案内や地図をもとに、自分で各部屋へ移動する。
- 実施場所はさまざまで、個室や来客用スペース、カフェのようなミーティングスペース、課室内のブース、書庫のような部屋などがある。
- 完全な個室だけでなく、簡易的に仕切られたスペースや、周囲で職員が仕事をしているオープンな空間で行われることもある。
- ゆったりとした会議室で複数組の説明が並行して行われる場合もあり、実施場所によって職場の雰囲気を直接感じられる。

業務説明中に意識していたこと

説明を受ける時の姿勢

- 自分の関心分野に引きつけて質問し、日頃抱いている素朴な疑問や課題意識、自分なりの外交観を率直に伝える。
- 臆することなく、自分の考えを堂々と述べ、職員の方々の意見や考え方を積極的に聞く。
- 業務説明の中で生じた疑問を大切にし、担当業務の内容から逸れないよう意識しながら質問する。
- 人事面接のように自分をアピールする場と捉えるのではなく、専門家に直接疑問をぶつけ、学びを得る機会として楽しむ。

質問内容・深め方

- 日本外交や国際情勢、特定の国・地域に対する関心をもとに、職員の方々の経験や見解、現在の課題、今後の展望について質問した。
- 自分の考えを交えながら対話し、同じ国・地域でも課によって見方が異なることなど、多角的な視点を意識した。
- 外交官としてこれまで携わってきた業務や今後取り組みたいことなどを伺い、入省後のキャリアパスについての理解を深めた。
- 外務省の魅力や職員の方々の特徴についても質問し、組織や働く人への理解を深めた。

学びと活用

- 回を重ねるごとに自分の考えをアップデートし、新たな視点や気づきを得ることを意識した。
- 原課訪問で得た知識や視点を人事面接にも活かせるよう、毎回新たな学びにつながる質問を心がけた。
- 一つの話題に偏らず、幅広いテーマについて質問することで、日本外交や国際情勢への幅広い関心を示すように意識した。

業務説明の正直な感想

全体的な感想・雰囲気

- 純粋に楽しく、充実した時間を過ごせた。
- 官庁訪問前は緊張していても、職員の方々が温かく迎えてくれるため、最後にはリラックスして笑顔で終えられることが多い。
- 選考を意識しすぎず、外交官の方々と直接話せる貴重な機会そのものを楽しむことが大切。

学び、理解の深化

- 日頃の説明会とは異なり、1対1でじっくり話せるため、業務の実態や率直な意見、エピソードトークなど、よりリアルな話を聞くことができる。
- 政策の第一線で活躍する職員の話を直接聞くことで、外交や政策への理解が深まり、多角的な視点を得られる。
- 同じ質問でも、職員それぞれの経験や考え方によって異なる回答が得られるため、自分自身の意見や考えを深めるきっかけになる。
- 入省後の業務やキャリアを具体的にイメージできるようになる。

対話を通じた気づき

- 自分と近い考えを持つ職員に出会い、共感や刺激を得られることがある。
- 日本外交の今後のあり方などについて、職員の率直な考えを聞くことで、仕事への熱意や外交に対する理解が深まる。
- 人事担当者がエントリーシートの内容を踏まえて面談相手を調整していることが伝わり、自分の関心に合った話を聞ける場合もある。

官庁訪問における意義

- 業務説明を通じて得られる学びや成長は大きく、官庁訪問全体の中でも特に有意義な経験となった。
- 選考を過度に意識するよりも、職員との対話を通じて学び、自分の理解を深める姿勢が大切だと感じた。
- 貴重な機会なので、緊張しすぎず、積極的に楽しむことがおすすめ。

5．集団討論

外務省の官庁訪問の特徴の1つである「集団討論」。
その秘密をお届け！

事前準備したこと

- 予備校が開催している模擬演習に参加した。
- ZOOM等を活用し、友人と自主的に対策会を開いた。
- AIにお題を出してもらって自分で考えてみた。
- 議論する機会があれば積極的に参加した。
- 出題されそうな日本外交のテーマについて軽く確認しておいた。

シンキングタイム

- 自分の言いたい中心的な意見を必ず言えるように準備した。
- 箇条書きで自分の言いたいことを整理した。
- 時間が限られているので、分かりやすく伝えるようにメモを構成した。
- キーワードを盛り込めるように準備した。
- 課題、あるべき姿、譲れる点は何かを考えた。

議論中

- 言いたいことを言えるように、多少の思い切りを意識した。
- 未出の論点や議論の妥協点を探し、他の人が言っていないことを言おうとした。
- 議論の流れに抗わず、相手の意見にしっかり答えることを意識した。
- 自分が話し過ぎないように遠慮した。

反省点

- 時間が終わるのが思ったより早く、終盤は議論の時間が足りなかった。
- お題が難しく、専門的内容に踏み込めなかった。
- 事前に外交・国際法関係の勉強をしておけばよかった。
- 待機時間に歓談できると話しやすい雰囲気ができると思う。

６．印象に残っていること

全体として印象に残ったこと

- とにかく自分らしくいられたこと！原課の議論等も本当に楽しかった。
- 他者との競争というよりも、自分の忍耐力や熱意が試されていると感じた。
- どの省庁においても、日本の政策の中枢を担う方々と長時間お話できた貴重な経験だった。官庁訪問までに自分の考えはほとんど決まっていると思っていたが、いざ始まってみると迷いの連続で、自分と向き合うとてもいい機会でもあった。
- 業務説明で、外交の実務の現場についてのたくさんのご経験を伺ったこと。あれほど長い時間職員の方のお話を伺える機会はなかなかないと思うので、とても贅沢な時間だった。
- 外交の最前線で働く職員の方々に率直に質問し、直接議論できる機会はなかなかないため、純粋に楽しかった。職員の方々の人間的な魅力に強く惹かれた。
- 第１クールでお話しした職員のご経験・視座・経験から、何かを生み出す創造力、全てに感銘を受けた。このような人になりたいという理想像を具現化したような方で、その方に「一緒に働きませんか」と言われた瞬間に涙が出た。
- 「今後は自分だったら、何のしがらみもなかったとしたらどう外交を行いたいか考える癖をつけなさい」との言葉をいただいたこと。
- 日中関係担当の方の情熱のこもったお話がとにかく面白く、時間が一瞬に感じられた。
- 外交官(実務家)と研究者の違いを自覚できているか問われたこと。自分の考えを伝えたところ、「その通り」と言っていただけたことがとても印象に残った。
- 以前から興味を持っていた分野の方とドンピシャでマッチングしていただいたときは驚いた。その際に伺った業務や、外務省が大事にしている価値観を人事面接に活かすことができ、とても有意義だった。
- 業務説明に向かう道で迷っていたら、通りかかった職員の方が優しく案内してくださり、心が温まった。
- 第３クール１日目。警察庁に行くか、外務省に行くか、本当に直前まで決められず、警察庁と外務省の間にある横断歩道を何往復もしたこと。
- 既に働いている友人と省内で会ったこと。
- 夜、数人でコンビニにご飯を買いに行ったこと。
- 待ち時間にたくさんの熱い友人に出会えたこと
- とにかく長時間臨む体力とメンタルを問われたこと。

官庁訪問の待ち時間の印象

- 待ち時間はリラックスして過ごせた。他の志望者やロジを行ってくださる３年目職員の方と話しながら、面接や業務説明の振り返りをした。
- 待合室がとても賑やかで、初めて会った人ともすぐに仲良くなれた。互いに励まし合う雰囲気がとても支えになった。
- 和気藹々としていてとても楽しかった。お菓子もたくさん用意してあり、とても嬉しかった。
- いつ呼ばれるかわからず、ドキドキした。
- 読書でもしようと思って本を持って行ったが、緊張しているので何も手につかず、友人と話したり、ゲームをしたりするくらいしかできなかった。
- 温かいお茶を水筒に入れて持って行ったことがとても良かった。温かいものを口にすると気が休まる気がした。
- 長時間にわたり、いつ呼ばれるか分からないというストレスのかかる環境だったが、官僚の仕事にも通じる部分があると感じた。長期間にわたってストレスのかかる環境に置かれても、安定してパフォーマンスを発揮できるかを測る上で、最適な環境だと思う。

官庁訪問期間の生活での思い出

- 休日や訪問しない日は部活に参加して気を紛らわしていた。
- 第１、２クールは３日目を休みにしていたので、２日目が終わるとひとりで霞ヶ関から数駅分、散歩して、心と頭を空にする時間を作っていた。
- 緊張で全然ご飯が食べられなかった。何もしていないと官庁訪問のことを考えてしまうので、訪問なしの３日目は普通に授業を受けに大学に行ったり、休日は友人とカフェで話したりしていた。
- ワールドカップの期間だったので、日本対オランダや日本対スウェーデン戦を見てから官庁訪問に向かった。
- 直前期は地元や東京の神社をいくつも回った。休日はたくさん寝た。
- 一人暮らしなので、帰宅後夕食を作るのが億劫になることを見越して、作り置きするようにした。好きなおかずをお弁当に入れてお昼に食べることで気分が上がった。
- 第１クールの後の週末は、妹の運動会を見に行った。応援しながらも、どの省庁にするべきかをずっと考えていた。
- 休日はクラシックのコンサートに行くなどして、リフレッシュに努めていた。
- 卒業論文の提出の時期と重なったため、官庁訪問中も卒論のリサーチを続けていた。疲労が極限大に達していた気もしたが、両方やり遂げたことは自分の自信になった。
- ３省庁回ったため、クール間の休みがなく、体力がきつかった。
- 官庁訪問はその日中に整理しきれないほどの学びや気づきがあるため、そのまとめ直しをしつつ、散歩をしたり、カフェに行ったりして過ごした。
- 第１クールと第２クールの間の休日は、同じ志望者の友人と集まり、面接練習をしたり雑談をしたりした。ずっと家に籠っていると不安や緊張に襲われてしまうと思うので、友人と話して元気をもらえてよかった。
- 第１クール３日目にどこも回らずに日本語教師のアルバイトに行ったり、土曜にサークルに顔を出したことで、リフレッシュができた。日曜は第１クールを振り返って思考を整理したり、自己PRを練り直す時間に当てていたが、これも第２クールにおいて役に立った。

7．外務省の決め手

外務省専願の理由

- 国際政治や歴史に関心があったため。
- 外務省に行くことしか考えていなかった。
- 官僚というより外務公務員志望だったため、他省庁の政策領域には関心のないものが多く、海外に展開する民間の方が第二志望として魅力的だったから。
- 国家公務員という枠組みで迷ったのではなく、国際機関職員、NGO・NPO、JICAなどで迷っていたから。
- いろいろな官庁の説明会等を巡りつつ、自分がやりたい仕事・キャリアパスが叶う場所は外務省しかないと確信できたから。
- 防衛省も志望していたが、最終的には訪問しなかった。外務省で扱える政策の幅が、防衛省より広いと感じたから。自分のバックグラウンドや適性、性格が外務省に、よりフィットしているのではないかと思った。
- ２日目も訪問する予定だったが、内定先の懇親会と日程が被ってしまい、そちらを優先したから。
- 大学のフォーラムなどで他省庁の説明は聞いたもののあまり惹かれなかったため。
- 就活・公務員試験対策に多くの時間を割けなかったため。

他省庁や民間企業との併願の軸

- 日本の平和や国民生活の安全・安心に寄与すること。
- 国民が安全を享受できる土台の形成に貢献すること。
- 人々の当たり前の生活が守られる日本であり続けるために働けること。
- 安全保障や国家間関係を扱うことができ、日本の平和に貢献すること。
- 安全保障をメインに携われること。
- 「世界の中の日本」という視座を持つこと。
- （特に対外的に）日本の平和と安定を守ること。
- 国家の基盤的な責任を担い、一人一人の国民が自由にその個性を発揮して、利益と価値を追求できるような前提を支えることに貢献できるような任務を担う省庁であること。（外務、財務、防衛）
- 民間ではなく行政にしかできない仕事をすること、外交や一次産業の保護は行政にしかできないように感じた。
- 特定の政策分野にかかわらず、日本全体を考えた仕事ができること。
- 両方に繋がる軸は用意せず、それぞれに関心があると両方の省で話した。
- 正直に言うと、外務省と併願している理由を作りやすい省庁から選んだ。

併願先の省庁との雰囲気（職員、志望者など）の違いなど、気になったこと

- 外務省には、オープンでフラットな組織風土があると感じた。学生への配慮が行き届いており、人事担当者の方々も一つひとつの発言に細心の注意を払っていると感じた。言葉を扱うことを仕事とする外務省ならではの強みなのかもしれない。限られた時間の中で学生一人ひとりを深く理解することは容易ではないはずだが、その限界を認識した上で、学生の話にしっかりと耳を傾けるための時間を確保している姿勢が印象的だった。官公庁や民間企業も含めて見ても、その真摯な対応には非常に好感を持った。
- 併願先と比べて、外務省の志望者は良い意味で自分に自信がある人が多いように感じた。
- ２日目に訪れたこともあり、地方自治に関心がある人、通商に関心がある人などさまざまなバックグラウンドの人が多かった。
- 外務省は、特に和気藹々とした雰囲気だった。
- 他省庁に比べ、待ち時間の雑談に花が咲いていて、明るい印象だった。
- 組織や集団でどのように動くか、以上に個を大事にしているように感じた。
- 職員の方々が温かく、学生と積極的に話してくださった。
- 待機室にいらっしゃった若手職員の方から、面接した管理職の方に至るまで、外務省の職員の方々が最も魅力的で、自分の性格に合っているように感じられた。
- 職員の方々が、各々の国際社会に対する見方と、自らの職業上の責務に関する哲学を持っている印象を受けた。
- 留学先や大使館勤務先が異なるからか、他省と比べて個性的な方が多かった。
- 志望者に関して、やはり海外経験のある人が多い傾向にあると感じた。
- 他省に比べて、興味・関心分野がより広い志望者が多い印象を受けた。
- 志望者、職員ともに様々な人がいて、多様性に富んでいた。画一的な発想ではなく、柔軟で幅広い視野、考え方を持った人たちが魅力的だった。
- 他の省庁についてネガティブなことを言わない。仕事内容はマクロなものが多い。
- 待ち時間が圧倒的に長かった。

最終的な外務省の決め手

- もともと外交官になりたかったから。
- 外務省の方とお話しているときが一番楽しかったから。
- 自分のやりたいことと外務省の考え方が近しいと感じたから。
- 業務説明でお話を伺った方を含め、お会いした方々が魅力的で、自分の「なりたい大人像」だと感じたため。
- 業務説明を通じて、自分自身の個性や考えを持つことを大切にされている職員の方に多く出会い、その姿が自分の理想とする将来像と重なったから。
- 雰囲気の良さ。10年、20年と働くことを考えたときに、外務省の雰囲気が自分には1番合っていると思ったから。
- 自分の限られた人生の中で、他の人に任せるのではなく自分がやりたいと思えることは対外関係である、と官庁訪問中に確信したから。
- 職員の方と話し、自分のやりたいことが外務省でできる可能性が高いと強く感じたから。
- 迷ったが、将来がより想像できない方を選ぼうと思ったから。
- 国内よりも色々な外国で仕事をしたい思いが強かったため。
- ２年ごとに違う部署や国に行ける働き方を魅力に感じたから。
- 扱う内容の幅広さが魅力的だったから。
- 外務省が扱うフィールドが幅広く、そのダイナミックさと、入省後の自分の姿が良い意味でまったく想像がつかなかったことに惹かれたから。

いかがでしたか…？
内定者一人ひとりの進路選択における葛藤を見て取れたのではないかと思います。官庁訪問中にも気づきがたくさんありますよ！



04. 内定者の就職活動

1.就職活動基本情報

2.説明会特集

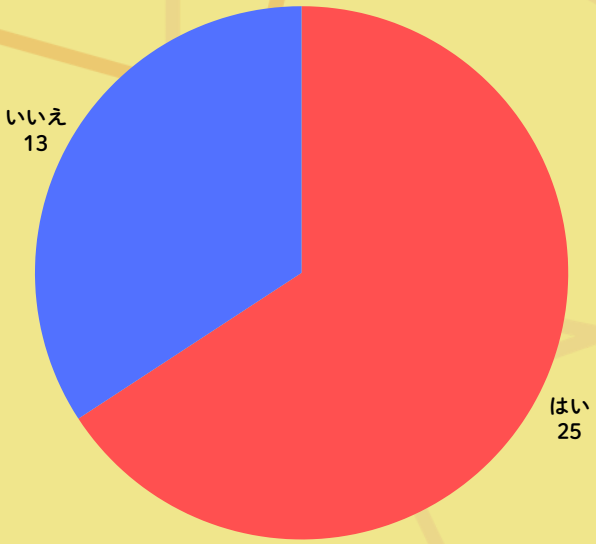
3.就職活動体験記

民間企業の就活と公務員の就活について、両立すべきか片方を選ぶべきか迷う方は少なくないと思います。

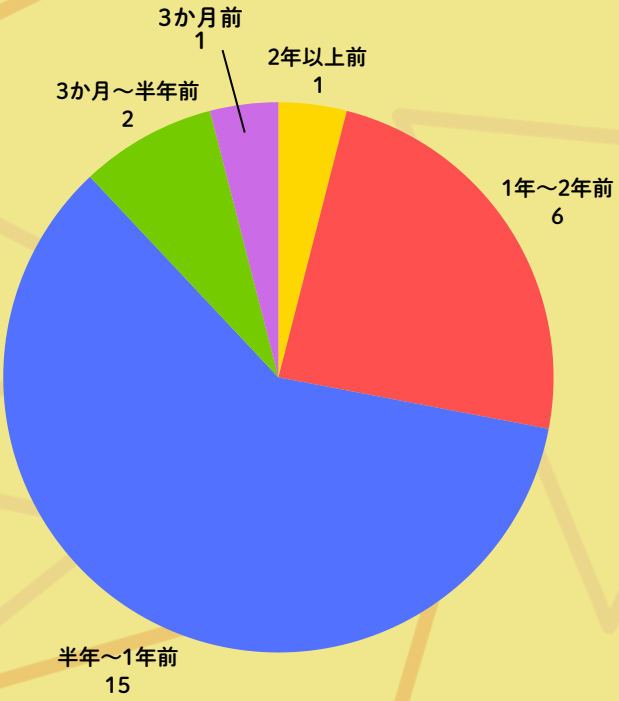
ここでは、民間就活で内定を得た人や公務員専願で就活に臨んだ人の体験談を紹介します。
民間企業の就活と並行して、外務省を目指すという選択の後押しとなれば幸いです。

1. 就職活動基本情報

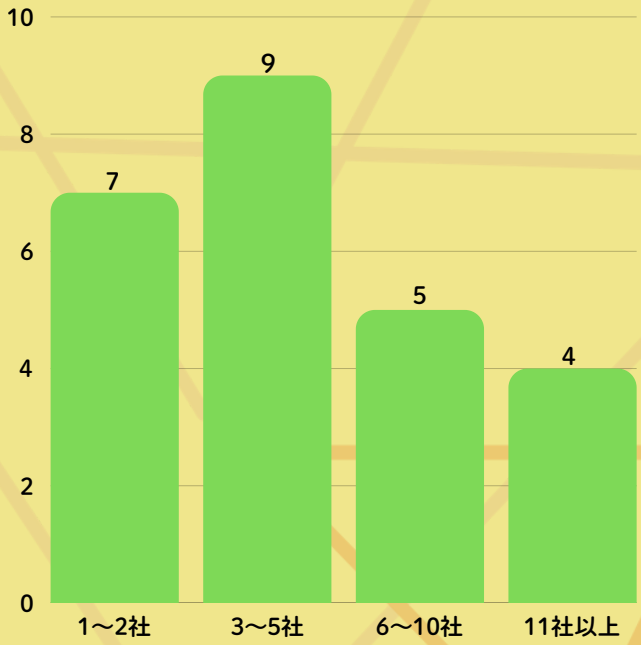
①民間就活をしたか



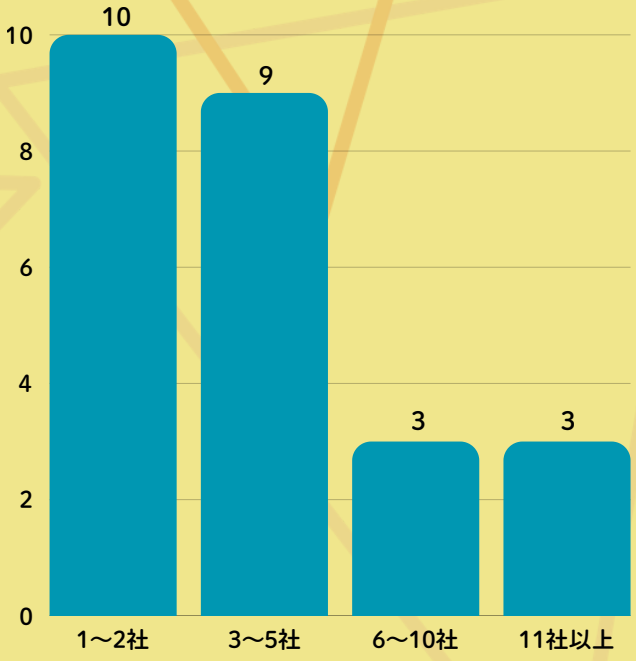
②民間就活を始めた時期（官庁訪問から）



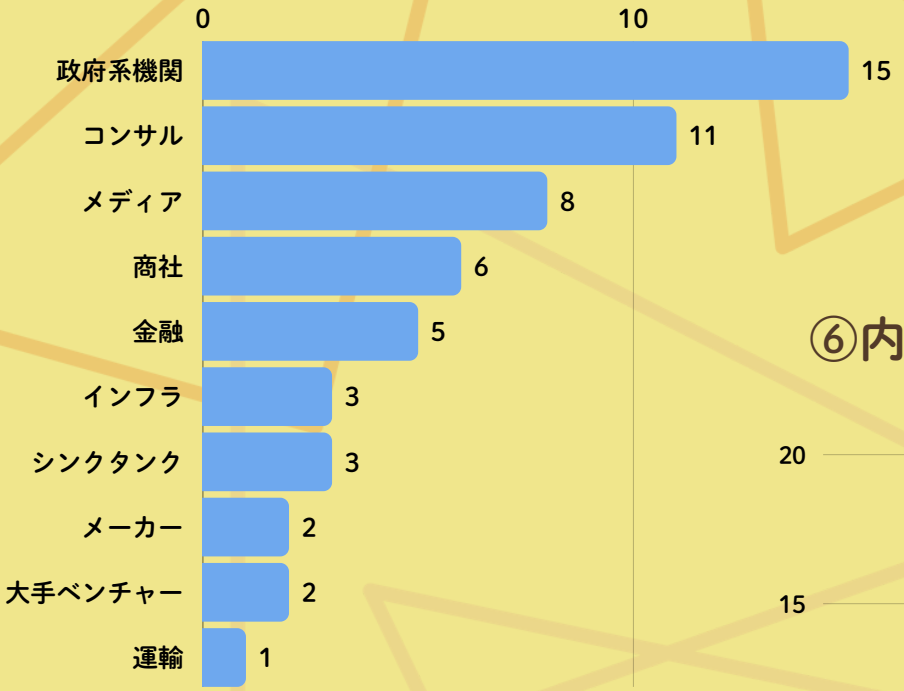
③ESを提出した企業数



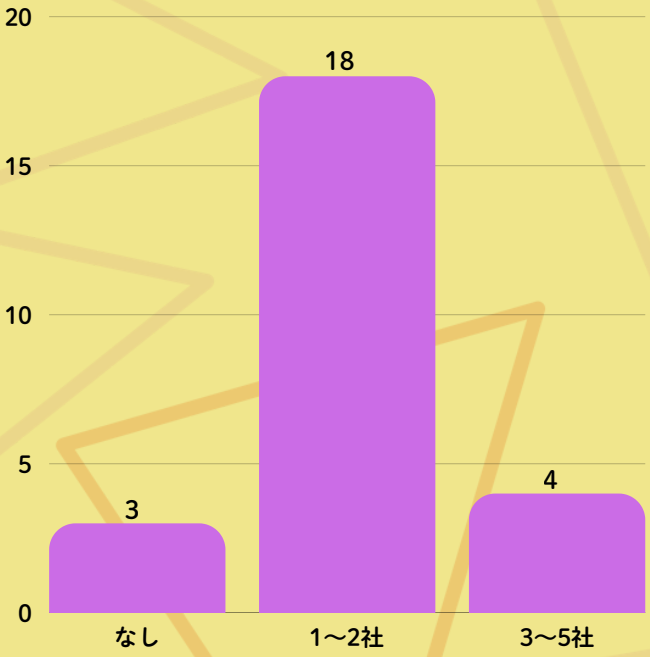
④面接を受けた企業数



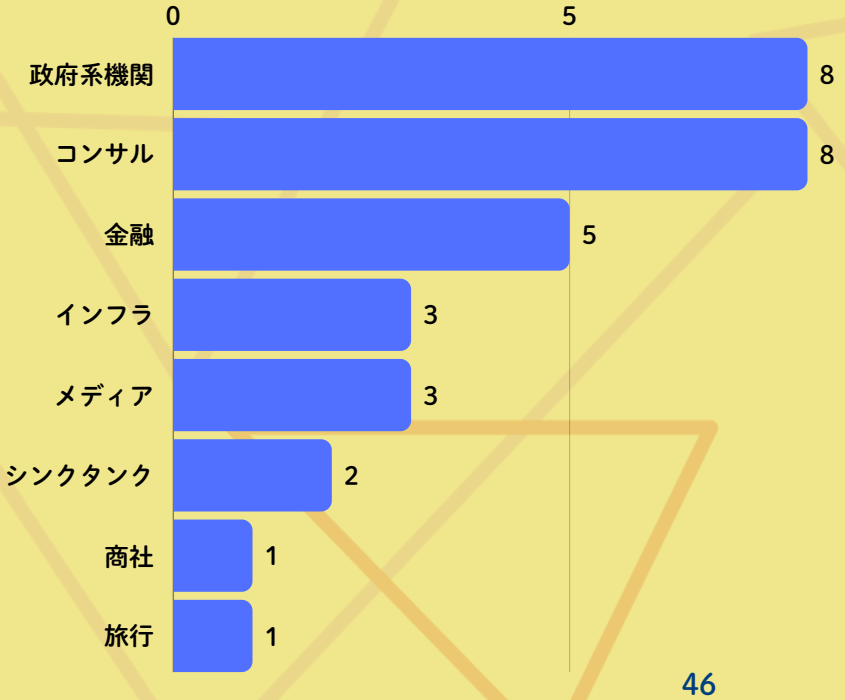
⑤受けた業界



⑥内定をもらった企業数



⑦内定をもらった業界





2．説明会特集

年間スケジュール

外務省は例年、学生や志望者を対象とする説明会を実施しています。
今年の内定者もその大半が事前の説明会に参加していました。内容は、外務省のキャリアパスや外交政策に関するものから個別相談に至るまで多岐にわたります。参考として昨年度のスケジュールをまとめました。
※日程や形式は、あくまで2025-2026年の情報であり、変更される可能性があります。今後の情報は冊子裏にあるQRコードから、公式ウェブサイトをご覧ください。

時期	内容	形式
7-9月	採用担当との少人数座談会	オンライン・対面
8月	2025年度国家公務員OPENゼミ	オンライン・対面
11月	業務説明会	オンライン・対面
12月	公務研究セミナー	オンライン・対面
12月	政策シミュレーション	対面
12月	警察庁×外務省×財務省×防衛省共催 パネルディスカッション	オンライン・対面
1月	政策シミュレーション	オンライン・対面
1-2月	業務説明会	オンライン・対面
2月	政策シミュレーション	オンライン・対面

時期	内容	形式
3月	外務・財務・経産共催パネルディスカッション	オンライン・対面
3月	公務員ウィンターフェスタ	オンライン
3月	政策シミュレーション&業務説明会	オンライン・対面
3-5月	採用担当との個別相談会	オンライン・対面
4月	国家公務員採用総合職試験一次合格者等対象 本府省合同業務説明会	オンライン
5月	外務省業務説明会	オンライン・対面
5月	官庁訪問説明会	オンライン

説明会活用方法

先述の通り、内定者は、一般的に数多くの説明会やイベントに参加している傾向があります。

しかしながら、単純にたくさんの説明会に参加することがゴールではないはずです。過度なプレッシャーを感じることなく楽しむことは言うまでもありませんが、重要なのは、それらの説明会から何を学び、その知識をどう活かすかを考えることです。

この点において、主体性を持って参加することは重要でしょう。ただ漫然と参加するのではなく、各説明会で自分は何を知りたいのか、あらかじめ考えます。説明会後には、どのような印象や考えを抱いたのかを明確に言語化することが大切です。また、キャリアパスや外交政策の具体的な内容はもちろんのこと、職場の雰囲気や職員一人ひとりの姿勢などにも意識を向けることで、外務省での実際の業務のイメージを具体的に掴むことができるかもしれません。さらに、議論百出となるような政策課題について、自分はどう考えるか、説明会などで得た知識を活用し、根拠を伴って言葉にできるようになれば、官庁訪問に向けた絶好の準備にもなります。

就活体験記１．JICA



名前：K

専攻：法学・政治学

備考：首都圏出身、留学経験あり

就活軸と併願先

就活軸：信頼で世界をつなぐことで日本の平和と安全を守ること
併願先：政府系機関（JICA）、総合商社
併願先を選んだ理由： 貧困や紛争を身近に感じて育ったため、人々が恐怖と欠乏から自由な世界を途上国と「共に創る」仕事をすることは幼い頃からの夢でした。その夢を貫いて、相手国と目線を合わせた協力をするというのは魅力的な選択肢でしたし、また、留学先での経験から国と国との関係は人と人との関係であると信じるに至ったので、「信頼で世界をつなぐ」というJICAのビジョンにも共感していました。ただ、JICAは本選考の開始が遅いので、世界に安定した社会基盤を届けるという点で似ていそうだと思った総合商社も受けていました。

悩んだ点と決め手

大学に入学した当初はODA単体への関心からJICAを志望していましたが、JICAのインターンでFOIPの核の一つである海上保安に触れたり、留学先で安全保障を学んだりしたことで、自分の関心が「日本の平和と安全を守る」ことへと広がりました。留学先で外交の現場を覗かせていただいたことも影響し、徐々にJICAよりも外務省に行きたい気持ちが強くなっていきました。

苦労と工夫した点

総合商社を志望度も解像度も低いまま受けたので、内定をいただけなくて一時期落ち込んでいました。しかし、なぜその企業と合わなかったのかを冷静に分析し、心からやりたい仕事を考えるための材料にするという心持ちで過ごし、結果的にJICAと外務省の志望度が高まりました。官庁訪問対策との両立については、JICAに受かってから外務省の対策をすると決めていたのと、大学3年生の間に教養区分で合格していたことであまり苦労はありませんでした。

年間スケジュール

時期	就活状況	コメント
2024.冬	民間：JICA冬季インターンシップに参加	海上保安に関するインターンを行う。日本の平和と安全に携わることへの関心が芽生える。
2024.夏-2025.春	留学	オーストラリア・キャンベラでアジア大洋州の安全保障を学ぶ。
2025.夏	官庁：省庁の説明会などに参加、外務省インターンシップに参加、教養区分一次試験の勉強開始	外務省職員の方の話を多く聞かせていただいたことで、外交への自分なりの理解が深まった。
2025.秋	官庁：教養区分１次試験合格、２次試験対策開始	登録日本語教員の資格取得に追われ、民間就活は全くしない。
2025.冬	官庁：教養区分合格	席次は真ん中より少し良いくらいで落ち込む。
2026.1	民間：総合商社の本選考へエントリー	ようやく本格的に民間就活開始。
2026.2-3	官庁：外務省の説明会に参加	同時期に商社に落ち、自分は社会に受け入れてもらえないのかもと落ち込む。
2026.4	民間：JICA内々定	民間就活終了とともに官庁訪問の準備を始める。
2026.6	官庁：官庁訪問	

後輩へのメッセージ

JICAは、日本のODAに色んな角度から携わることができる世界で唯一無二の職場です。現場から近い在外事務所はもちろん、国内各地に拠点があったり、東京本部においても地域部・課題部ともに多種多様で、調達をする部署や案件評価をする部署、さらにはODA全般の企画に携わる部署など、さまざまあります。職業人生をかけて川上から川下まで日本のODAに携わり、その中で自分の国際協力観を多面的に養っていけるのは、世界広しといえどもJICAにしかない魅力だと思います。一方、日本外交の任務は「国際社会における日本国および日本国民の利益を増進する」ことで、これまた唯一無二の職業です。私は、日本の利益を第一に考えて仕事ができる外務省の方が自分の目指す方向に合っていると感じ、最終的に外務省を選びましたが、大切なのは自分がどのような世界を実現したいのか、そのためになぜ自分がその仕事に携わりたいのかを自分の言葉で伝えることだと思います。目指す世界は人それぞれですが、それをしっかり自分なりに言語化できれば、自分に本当に合った企業や省庁にはきっと思いが伝わるはずです。

就活体験記２．JBIC



名前：N

専攻：政治学

備考：地方出身、留学経験あり

就活軸と併願先

就活軸：日本全体の利益を考えた公的なアプローチ。政策立案やルール形成に直接関わりたいという想い。

併願先：シンクタンク・政府系機関（JBIC）

併願先を選んだ理由：たとえ官庁に行けなくてもどこかで日本の政策を支える職業に就きたいという思いから、経済分析や政策提言を行う民間シンクタンクと、省庁のもとでプロジェクトを動かす政府系機関を志望しました。

悩んだ点と決め手

中立的な立場から政策提言ができ、柔軟に働けるシンクタンクと、国際金融を通じて国益を直接支えるJBICに惹かれました。JBICは政府代表として各国政府とやり取りしつつ、企業の海外展開やエネルギー・半導体等への投資といった手触り感のある仕事ができる点が魅力的でした。

しかし、自分が一番やりたいのは国際秩序におけるルール形成を通じた国益への貢献であり、それを実現するには外務省しかないと考えました。シンクタンクは提言に留まり、政策を実行に移すには官庁の立場が必要で、外交政策に関わる機会も限定的です。また、JBICの投融資プロジェクトも重要ですが、自分はその前提となる大きな政策立案に携わりたいと考えました。多様な政策ツールを用いて他国と関係構築を図る仕事は外務省にしかできないと考え、最終的な決断に至りました。

苦労と工夫した点

説明会参加、インターン、面接…という就活イベントと学業の両立に苦労しました。個人的には選考に関係のあるイベントを優先させつつ、官庁が第一志望なら受ける民間企業を絞り、官庁の説明会に出られるようなスケジュールを作ることが大事だと思います。面接等に関しては、それぞれの業界や企業・機関の特徴・差異を具体的に理解したうえで、自分の熱意・関心を言語化するようにしました。

年間スケジュール

時期	就活状況	コメント
2025.7-9	官庁：外務省インターン・説明会、教養区分１次対策 民間：説明会・WS	インターンを通じて外務省志望が高まる。９月は教養区分対策に苦心。
2025.10-11	官庁：外務省・防衛省説明会、教養区分２次対策 民間：冬インターン選考、説明会	秋学期が開始し、スケジュール調整が大変。
2025.12-2026.2	官庁：外務省・防衛省・財務省説明会 民間：冬インターンに参加、本選考ES提出	民間に注力していた部分が大きい。ESは友人に添削をお願いした。
2026.3-5	官庁：財務省説明会・WS・職員訪問、外務省個別相談会 民間：本選考面接	３月にシンクタンクの内々定を獲得できたことで安心感。４月以降は政府系機関の面接に注力。
2026.6	官庁：官庁訪問 民間：政府系機関内々定	JBICは本選考での内定だったので、官庁訪問ギリギリまでかかった。

後輩へのメッセージ

JBICはインフラやエネルギー開発、半導体投資など、海外と関わりつつ日本の経済発展や経済安全保障の実現に携われる非常に魅力的な機関です。他方、外務省は経済のみならず、安全保障、文化広報など、様々な政策ツールを用いて他国と関係構築を図ることが仕事です。先に述べたように私はルール形成への関心から外務省を選びましたが、政府系機関が行うプロジェクトなど現場のことをしっかり理解してこそ、日本の政策についての知見が深まるように思います。
このように、民間就活には自分の選択肢を広げると同時に「視野を広げる」側面があると考えています。世の中にはどのような仕事があって、普段どのような業務をしているのかを深く知れるのは、就活生という立場の特権です。また、民間企業について分析することで省庁との仕事の違いも明確になり、比較を通してより外務省への思いが高まった部分もあります。スケジュールへの不安もあるでしょうが、民間就活という経験は官庁を目指すうえでプラスになるはずです。

就活体験記３．JETRO



名前：J

専攻：国際関係論

備考：首都圏出身

就活軸と併願先

就活軸：①短期的な利益追求に囚われない仕事②特定地域への理解を深めつつ、世界全体への大局的な視点も養える仕事

併願先：政府系機関（JETRO）

併願先を選んだ理由：留学を通じて日本社会への帰属感が増したのでパブリック系の仕事へ漠然と興味が湧きました。JETROには調査部があり、特定地域への関心を深められます。同時に、海外進出する日本企業への支援や対日投資促進業務を通じて、日本経済全体への視点も養うことができます。また、大学で学んだのは国際関係論でしたが、地域研究にも元々関心があり、特定地域への理解を深められる仕事にも就きたいと考えました。

悩んだ点と決め手

JETROはワークライフバランスに配慮してくださる機関だと感じました。また、自らのキャリアについても、独立行政法人の方がより主体的に決められる印象を受けました。さらに、現場との距離も外務省とJETROだと差があります。日本企業の海外進出をサポートするJETROと、対外関係において日本全体の立場を決定する外務省とのミッションの違いにも悩みました。

どちらも魅力的な職場ですが、最終的にはミッションへの共感度と初志貫徹したいという思いから外務省に決めました。

苦労と工夫した点

面接が官庁訪問の直前だったので、スケジュールの両立が大変でした。

官庁訪問の人事面接対策とJETROの面接の対策を同時にすることで、時間を節約しました。

年間スケジュール

時期	就活状況	コメント
2025.7	官庁：外務省インターン選考漏れ	少し落ち込むが、内定した先輩も以前落ちていたことを知り安心する。
2025.8	官庁：外務省の採用イベントに参加し始める、教養区分の勉強を開始	7月下旬くらいに予備校のオンライン履修生になる。サークルのイベントの手伝いもあったので、本格的に勉強を始めたのはお盆明けくらい。
2025.10	官庁：教養区分１次試験	長丁場だったのでかなり眠かった。適宜トイレ休憩などをとってほしい。
2025.11	官庁：教養区分２次試験	企画提案をかなり頑張って対策したら、あまり深い質問が飛んで来ず、拍子抜けした。
2026.3	民間：JETROの採用イベントに参加	JETROの新入構員の座談会に参加した。JETROの雰囲気を知る良い機会だった。
2026.4	官庁：官庁訪問対策会開始 民間： ES提出	友人数人と官庁訪問対策会を２週間に一度ほど始める。ESは何を書くか迷いつつ、締め切りギリギリの提出になったと記憶している。官庁訪問対策は志望動機の相互添削が主だった。
2026.5	官庁：官庁訪問対策 民間：本選考面接	5月になると、模擬面接もするようになる。自分の志望動機の核となるところは両組織で共通していたので、模擬面接を通じてどちらも対策することができた。

後輩へのメッセージ

　就活を始めたばかりの時は、外務省以外を全く見ていませんでした。しかし、他の選択肢も見ていく中で、JETROなどの魅力的な組織についても知ることができました。他の組織の就活を経験することで、外務省の志望動機もクリアになったと思います。

　初めての採用面接がいきなり官庁訪問だと緊張してしまうと思うので、そういった点からも、似た領域の企業・独立行政法人を少なくとも一つは受けることをおすすめします。

就活体験記４．コンサル



名前：N

専攻：教養

備考：首都圏出身、留学経験あり

就活軸と併願先

就活軸：① 進化し続ける自己成長：柔軟に学び続け、年齢を重ねるほどに自信を持てる人間を目指せるか。② 共創による社会課題解決：互いの価値観をリスペクトし、活発に議論できる環境で大きな社会的価値を生み出せるか。

併願先：コンサルティングファーム

併願先を選んだ理由： 成長スピード、議論ができる文化、リーダーとしてプロジェクトを動かせるなど、経験できることが揃っているから。将来的に、国際機関やNGO・NPOで働くための第一歩として併願しました。

悩んだ点と決め手

制度の狭間にいる個人に直接手を差し伸べるべきか、国家の仕組みを動かし、制度を創出・改善する側に立つべきかで悩みました。また、併願先と比較し、官僚組織の中で若手のうちから十分な裁量を持てるかという不安もありました。

決め手は官庁訪問でした。職員の方々と対話を重ねる中で、国家公務員・外務省の仕事は型にはまらず極めてクリエイティブだと実感しました。また、責任の重さを考えれば、裁量は与えられるものではなく、信頼を積み重ねた結果ついてくるものだと認識が変わりました。特に、この人のようになりたいと思える職員の方に出会い、心が動いた瞬間に覚悟が決まったように思います。

苦労と工夫した点

民間就活が早い時期に終わり、夏の官庁訪問まで進路に深く悩みました。内定先の懇親会等でさらに魅力を提示される中、一時期は外務省への情熱が薄れてしまう瞬間がありました。迷いを打ち破るため、改めて自己分析し、「なぜ最初に外務省を志望したのか」という熱意を思い出しました。加えて、民間企業に気持ちが傾きがちだったからこそ、外務省の説明会等にも積極的に参加し直しました。双方の情報をフラットに増やし、誠実に比較・検討できるよう意識しました。

年間スケジュール

時期	就活状況	コメント
2023.9-11	官庁：教養区分受験・合格	ちょうど自分の代から２年秋の受験が解禁されたタイミング。留学期間中に試験の心配をしたくなかったこと、落ちても再チャレンジできる回数が多いことから、早めに受験。
2024.7	官庁：外務省インターン	実務の一端に触れたことで、それまで抽象的だった外務省での具体的な仕事内容やキャリアイメージが掴めるようになった。
2024.8-2025.6	フランスに交換留学	大学の授業、海外旅行、現地アルバイトなどに時間を割き、帰国直前から就活を本格化。志望業界のスケジュールが早いことを意識し、 2-3月頃から情報収集を開始。4-5月にサマーインターンのESを提出し、帰国直前の６月にはGDや面接等に対応。
2025.7-9	官庁：外務省座談会 民間：総合コンサルのサマーインターン	夏休みの予定が埋まるほど精力的に総合コンサル等のサマーインターンへ参加。一方で、8月に参加した外務省の少人数座談会にて新しい新卒採用担当の職員の方々と対話し、外務省への志望度が大きく高まった。
2025.10-11	民間：戦略コンサル冬選考、内定	サマーインターン経由で早期内定を獲得。 また大学での学びから国際機関やNGO/NPOへの関心が高まり、単なる滑り止めとしてではなく「将来のキャリアの土台」としてコンサル業界の魅力に気づき、戦略コンサルにも挑戦して内定を得た。ここから本格的に進路を悩み始める。
2025.12-2026.3	官庁：外務省説明会	魅力を増した民間内定先と比較検討するためにも、外務省の情報収集量を意図的に増やした。平均して週一回は直接足を運び、職員の方々との話を通じて原点にある熱意を思い出していった。

後輩へのメッセージ

就活は全力で取り組み、全力で悩むことを強くお勧めします。働くことは、自分や家族、社会に対して一定の責任を持つことです。だからこそ、感情や理想に流されず、現実的にキャリアを選択する視点が大切だと考えます。その際、官民の垣根を取り払い、幅広い選択肢を比較検討することは非常に有効です。

決して楽しいことばかりではないかもしれませんが、泥臭く悩み抜いた時間は、社会人になってから「自分の原点」として立ち返る貴重な財産になります。

就活体験記５．エネルギー



名前：L

専攻：教養

備考：首都圏出身

就活軸と併願先

就活軸： 自分の長所である語学を活かせること。
併願先：エネルギー
併願先を選んだ理由：チームワークを重んじる社風、他律的な業務の方が自分に合っていると考え、メーカーや商社などを受けていました。

悩んだ点と決め手

悩んだ点は、待遇です。というのも自分のためだけに働くのであれば、どれだけハードであろうと願ったりかなったり、望むところといった心持ちだったのですが、将来的なライフイベント等を考えた際に、やりがいだけを追い求めることがある意味で無責任になることも考えられました。民間企業内定先は社員満足度が非常に高いことで知られていたこともあり、外務省を選ぶことは非合理的な選択になってしまうのでは、と悩んでいました。しかしながら、尊敬できる先輩方や同期と働けるということが最後まで自分にとって魅力的であったため、外務省に入る決断をしました。

苦労と工夫した点

苦労したのは、モチベーションの維持です。民間就活中の２-３月は、外務省に入ることを信じて疑わなかったため、民間就活のための業界研究やES書きなどに気が進みませんでした。これを解決する手段として、OB/OG訪問が自分には効果的でした。加えて、民間の内定後の４-５月は、説明会に参加できないほどやる気を失っていました。また、官庁訪問時、第１クールの評価が周囲の優秀な同期の方々に比べ低かったのもこれに拍車をかけました。
工夫かどうかはわかりませんが、自分が外務省を志望しているということは周りにいるほぼ全ての人間に対して宣言してあったため、少なくとも自分から選考を辞退するようなことにはなりませんでした。

年間スケジュール

時期	就活状況	コメント
2023.秋	官庁：外交関連のゼミを受講	ゼミに感銘を受け、外務省職員を志すようになる。
2024.8- 2025.6	オランダ王国ライデン大学に交換留学	
2025.10	官庁：公務員試験を受験	
2025.11	官庁：外務省の説明会に参加開始	以降３月までに計20回参加した。
2025.12	民間：民間就活を開始	ES、適性検査など。
2026.1	官庁：外務省の職員訪問 民間：OB/OG訪問、面接	民間の面接もここで初めて経験した。
2026.2	官庁：外務省の説明会への参加が増加	「やってる感」が出てしまい、民間就活がおざなりになった。
2026.3	民間：結果が出始める	なぜ外務省で働きたいのかを言語化できるようになり、逆に民間の選考ではそれを隠すのがうまくなった。
2026.4	官庁：採用担当との個別相談 民間：内定	1on1を通じて、外務省への志望度が改めて高まった。

後輩へのメッセージ

民間就活は、外務省を志望するうえでは諸刃の剣です。なにか一つでも身の回りの状況が違っていたら自分はこれを書いていないという強い確信があります。しかしながら、本稿は皆さんに民間就活をしないよう忠告するものではなく、私としてはむしろ、自分が本当に外務省で働きたいと思っているのかを確かめるためにも、ぜひ民間企業を覗く機会を持つことをお勧めしたいです。そうすることで、「外務省でなければ成しえないこととは何なのか」、「なぜ自分はそれを成したいのか」そういったことが見えてくるはずです。それはきっと入省後に心の支えになるはずです。

就活体験記６．メディア



名前：I

専攻：法学（学部）国際関係論（修士）

備考：地方出身、イギリス留学経験あり

就活軸と併願先

就活軸：①パブリックマインドを持って働けること、②社会課題の解決の一端を担えること、③自分の専門性を活かした働き方ができること

併願先：新聞社

併願先を選んだ理由：説明会などに参加する過程で、民主主義や世論形成を支える役割の公共性の高さに魅力を感じ、併願しました。

悩んだ点と決め手

報道を通じて社会に伝えることで間接的に課題解決を促すか、国家公務員として制度を創出・改善することで直接的に課題解決を目指すか、悩みました。

決め手は、官庁訪問で職員の方々に直接お話を伺ったことです。一つ一つの仕事が日本の未来と日本を取り巻く国際情勢の大きな流れに繋がるものだと感じ、ダイナミックな働き方に心が震えました。また、職員の皆さんが熱い思いを持って働かれていることを実感し、私も自分自身が責任を負いながら、社会の安定や平和のために直接的かつ具体的な貢献ができる人になりたいと思いました。

苦労と工夫した点

公務員を本格的に志望したタイミングが遅く、試験のチャンスが限られていたことが心理的に一番大きい負担でした。予備校に通う資金も対策時間もない状態からのスタートとなり、いかに合格レベルに引き上げられるか苦労しました。

この状況でも公務員就活を続けられたのは周囲の助けのおかげです。ツテを辿り、合格した先輩や早期から対策していた同期の知恵を借りました。資料を貸していただいたり、勉強法や面接のアドバイスをもらったりと、多くの協力のもと対策を進めました。また、講義とアルバイトで各省庁の説明会に参加する機会が限られていたため、外交青書など各省庁発表の一次資料を読み込みました。自分なりに省庁の所掌や政策への理解を深めることで、官庁訪問の対策としました。

年間スケジュール

時期	就活状況	コメント
2025.3-5	ジュネーブ・ハーグに所在する国際機関と在外大使館を訪問	もともと国際機関やNGOで働きたいと考えていたが、国際情勢における国家というアクターの重要性を体感し、進路を再考。
2025.7	官庁：外務省インターンに落ちる 民間：新聞社サマーインターンに参加	外務省のサマーインターン選考が通らず、心が折れる。一日中泣いた。内定した先輩もインターンには参加していなかったと教えてもらって、気持ちを切り替える。 記者の国境を越える自由な働き方に魅力を感じる。
2025.11	官庁：教養区分に落ちる 民間：内定獲得	ほとんど対策する時間がないまま受験。もちろん落ちた。 新聞社に内定。
2025.11-2026.2	官庁：専門区分の対策・受験、説明会など就活イベントに参加	友人に諦めるな！と喝を入れてもらい、専門区分の受験を決める。当時は、公務員試験と公務員就活、アルバイトに加え、飛び級で院に入るために卒業論文と修士課程の講義も掛け持ちしていたので、とにかく時間がなかった。移動時間など隙間時間に工夫して勉強していた。
2026.3-4	官庁：説明会など就活イベントに参加、公務員試験１次合格	もともと外務省を志望していたが、警察庁の説明会に参加して、どちらの省庁も魅力的だと感じ悩み始める。
2026.5-6	官庁：公務員試験合格、官庁訪問対策	ESと志望動機のブラッシュアップ、面接練習など官庁訪問本番に向けて準備した。

後輩へのメッセージ

民間就活との両立については、課題を掘り起こすメディアと制度を作る国家公務員という両者の観点から人生を見つめ直したことで、「最終的にどの立場で社会に貢献したいか」が鮮明になりました。進路の選択肢を一つひとつ比較検討することで、自分が最も大切にしたい価値観を発見できると思います。

公務員試験については「早くから予備校で準備するもの」という印象が強く、スタートが遅れた私は大きな不安を抱えていました。しかし、自分に足りないものを素直に認め、周囲の人に助言を求めたり、一次情報から知識を吸収したりと、泥臭く工夫を重ねることで道は開けました。不利に思える状況であっても、諦めずに今できる最大限のアプローチを考えてみてください。限られたリソースの中で知恵を絞り、必死に食らいついた経験は、社会に出てからも必ず自分の強みとして活きるはずです。皆さんの挑戦を心から応援しています！

就活体験記８．外務省総合職専願



名前：Y

専攻：法学

備考：首都圏出身、海外経験あり

就活軸と併願先

就活軸：①日本のために働く、②異なる価値観や立場にある人たちと良いものを 共創する、③どれだけ辛くてもめげずに続けられそうか

併願先：旅行会社、経済産業省

併願先を選んだ理由：民間就活や他省庁を訪問しましたが、外務省から内々定をいただければ必ず選ぶと決めていたという意味で専願でした。

悩んだ点と決め手

周囲が民間就活を進め、早期インターンや内定をもらった話を聞くたびに、焦りを感じてしまったことが悩みでした。

苦労と工夫した点

中学生の頃から「将来の夢は外交官」という思いが固定化されていたため、「なぜ外務省か」「なぜ総合職か」という部分を一歩引いた視点から考え直してクリアにすることに苦労しました。

工夫した点は、行政官として働くことへの理解を深めたことです。さまざまな省庁の説明会等に積極的に参加し、どの省庁でも楽しく、国の政策立案に携わること自体に面白みを感じることができるのだと知ることができました。また、外務省以外で自分が興味を持った企業を深掘りすることで、自分はどのようなことに価値を見出しているのかを探ろうとしました。大学2年時の講義をきっかけに、ある民間企業を研究する中で、外務省に入れずともこの会社で働けたら幸せそうだと感じました。民間就活はこちらの企業のみを受けたのですが、それまで外務省にしか興味を持てなかった自分が惹かれた企業と真正面から向き合い、最終面接までやり遂げた経験は、自分の価値観を明確化させ、官庁訪問の際も軸をぶらさずに挑むための大きな糧となりました。

年間スケジュール

時期	就活状況	コメント
2024.秋	官庁：教養区分１次不合格	
2024.冬	海外の短期交流プログラムに参加	公務員試験勉強からは一旦離れた。
2025.春	官庁：数的処理の勉強を再開	
2025.夏	官庁：外務省インターンシップ 民間：１Dayインターンシップ	昨年の反省を活かし、本格的に勉強を開始。
2025.10	官庁：教養区分一次合格	
2025.12	官庁：教養区分最終合格 民間：早期選考に応募	外務省・農林水産省・防衛省の説明会に参加。民間の本選考を受けるか迷ったものの、「外務省一本勝負だけはやめた方がいい」とのアドバイスに納得し応募。
2026.1-5	官庁：外務省・経済産業省の説明会／政策シミュレーション 民間：内定獲得	

後輩へのメッセージ

外交官や外務省に憧れている人に対し、「憧れの気持ちは大切にしてほしい」と伝えたいです。その上で、しっかり現実にも目を向け、それでも自分の中に残ったものを大事にしてほしいと思います。

個人的な意見ですが、「憧れ」と「なぜその職に就きたいか」は、分けて考えられるもの だと思います。なぜ憧れているかを論理的に説明することは難しいと思いますし、説明できてしまえばそれはもう憧れではないのかもしれません。ただ、自分がその職業に人生をかけたいと考える理由は、きっとこれまでの人生の中にあり、だからこそ入省後に何をやりたいかというビジョンまで描けるのだと思います。

私は決して要領よく短期間で総合職試験に合格したタイプではありませんが、理屈では説明しきれない「憧れ」があったからこそ、最後まで諦めずに努力し続けられたのだと思います。一方、官庁訪問では外交に携わりたい理由を第三者が納得できる形で説明することが求められます。これに関しては、他省庁・民間企業などとの比較や、周りの友人や家族、外務省職員の方々に自分の考えをぶつけては指摘されるということを繰り返す中で磨かれていくと思います。今抱いている想いを大切に、前へ突き進んでください！

ミニ特集：公務員専願

内定者の多くは、民間企業にも応募していましたが・・・
国家公務員専願で就職活動に挑んだ内定者もたくさんいます。
そこで、国家公務員を専願した理由や、
後輩へのアドバイスについて聞いてみました！

民間にどうしても関心が向かなかったから。官庁訪問でうまくいかなかったらアカデミアに残るつもりでした。

途中まで大学院への進学を考えており、最終的にも志望度は国家公務員>大学院>民間企業だったため、国家公務員専願で内々定をいただけなかった場合は院試に向けて勉強する予定でした。

民間企業の説明会に参加すればするほど、国家の運営に関わりたい自分とのミスマッチを感じました。
小さい頃から国際関係が好きで、純粋な意味で国家間関係を扱えるのは外務省以外になかったため、専願しました。不安な日々を過ごすとは思いますが、自分を信じる事が一番大切だと思います。頑張ってください！

結局自分が人生を通じて成し遂げたいことを考えた時に生まれ育った母国である日本の安全と国益の実現に繋がる仕事をしたいなと考えたから。

社会人であったため時間的余裕がなく、専願しました。

どっちも手を出すとどっちも中途半端になると思ったから。民間企業の説明会で行きたいと思わなかったから。専願にすると周りがどんどん内定を取っていく中で焦ると思いますが、自分を信じて頑張ってください。

大学での学びを通して、大学院への進学も検討していたこと、また私は休学をしていたこともあり、課外活動などに多くの時間をかけたい思いがありました。
そのため、今年は国家公務員一本で就活を行っていました。
もっと視野を広げておいたらよかったのではないか、とあとがない中で不安になることもありましたが、今年公務員一本に絞ると決断した理由をしっかりと言語化して、自らの選択を信じるという気持ちを持って取り組んでいました。
就職活動中は不安になったり、悩みが尽きなくなることもあると思います。そんな時、私は「自分が納得できる選択であるか」ということを大切にしていたように思います。応援しています。

視野を広く持って日本の未来像を描き、国益や国民の利益を最優先に仕事ができるのは国家公務員だけだと感じた。

元々大学院進学希望だったが、大4のタイミングでもチャレンジしてみようと考えたため専願しました。

05.様々な内定者

- 特集１. 海外大経験者
- 特集２. ２日目訪問者
- 特集３. 再チャレンジ
- 特集４. 社会人経験者
- 特集５. 専門職併願
- 特集６. 特殊な専攻

特集１．海外大出身者



名前：M

政治学・
国際関係論専攻

公務員専願



名前：N

政治学・東アジア
研究専攻

公務員専願

外務省の志望理由

M: 大学2年時に目撃した中東情勢に対する学内デモの熱気や、韓国留学中に直面した戒厳令の体験が外務省を志望するきっかけでした。混迷を極める国際社会の中で、日本の国益を守り実現する仕事に就きたいと考え、外交官の道を志すようになりました。

N: 幼少期の海外在住経験や、大学時代の留学生をめぐる政府と所属大学の対立を通じて、これまで私が享受してきた安全と信頼は、先人が築いた外交的信用の積み重ねに支えられていると実感しました。今度は私がその信用を支えたいと考え、外交の道を志しました。

公務員試験について

M: 私は2025年の春試験（政治・国際区分）を受験しました。イギリス等の大学であれば秋試験の選択肢もとれると思いますが、私は大学のスケジュールの都合で春試験を選択しました。政治・国際区分は、一次・二次ともに英文問題が多く、ある程度の英語力がある受験者にとって非常に有利な構成だと思います。試験対策を始めたのは大学２年の秋からです。公務員予備校のオンライン講座を活用し、長期休み明けに日本から大量の教材をスーツケースに詰めて大学へ持ち帰っていました。そこから約1年半、毎日２時間ほどコツコツ勉強を続ける生活を送りました。国家総合職試験は出題範囲が広いものの、大学で受講している講義の内容と関連付けながら理解を深めることで、学業と試験対策を無理なく両立させることができました。

総合職受験において最もハードだったのが、日本への一時帰国です。一次試験は幸運にも春休みに重なったため、試験後に２週間ほど久々の日本での生活を満喫できましたが、二次試験は通常の週末だったため、パスポートや教材など最低限の荷物だけを持って２日間だけ東京に帰国する超弾丸日程となりました。なお、時差ボケ対策として、試験の数週間前から米国で昼夜逆転生活を送って調整していました。

人物試験に至っては大学の期末試験と丸被りしたため、事前に人事院に相談し、誓約書と証明書を提出のうえ、試験日を変更していただき、学期終了後に帰国して無事に面接を受けることができました。

就職活動全体について

N: 公務員就活は時間や金銭面などのハードルが大きいため、私は他の職業との比較にも十分に時間をかけ就活に取り掛かろうと思いました。近所でボストンキャリアフォーラムが開催されていたため、毎年足を運び、夏休みにはアメリカと日本で長期インターンなども経験しました。そうして様々な進路を考えながらも、外務省の仕事が一番魅力的に感じられ、試験を受ける段階で、就職活動は公務員一本に絞ることを決めました。

公務員専願にしたことで、就職活動に追われすぎず、課外活動にも比較的多くの時間を割くことができました。大学内では研究アシスタントや、外交に関する団体での活動、大学外では自分の関心分野に関する若者会議の参加など、とにかく自分がやりたいことに時間を使うことができました。

情報面においては、普段の説明会は、時差の関係で参加が難しい時もありましたが、夏のインターンシップはとても有意義な経験でした。外務省を目指す他の学生と知り合うことができ、試験や官庁訪問に向けて互いに励まし合えたことは心強かったです。また、ボスキャリでは、採用担当の小畠さんや前任の方にも、海外大学から外務省を目指すことについて親身に相談に乗っていただきました。

官庁訪問は、５月に大学を卒業し日本に本帰国したタイミングで挑みました。私は日本の就活の作法もよく分かっていなかったため、官庁訪問では変に取り繕うよりもありのままの自分を見てもらおうと思いました。そこでむしろ支えになったのが、海外大学での日々の経験だったと思います。前述した課外活動を通じて外交について学びを深めることができましたが、それ以上に大学生活の中で、国際情勢によって実際に生活に影響を受け、ときには涙を流す友人たちと向き合う経験がありました。そうした中で、国際政治は決して遠い世界の話ではなく、一人ひとりの生活に直接関わるものなのだと肌で感じました。こうした経験は、自分がなぜ外交に携わりたいのかを考える上で大きな土台となり、官庁訪問でも　自分の言葉で志望動機を伝えることにつながったと思います。

メッセージ

M: 海外からの受験は体力面でもスケジュール管理の面でも大変な部分が多いですが、決して不可能ではありません。この記事を通じ、海外で学ぶ皆さんが外務省をキャリアの選択肢の一つとして考えるきっかけになれば幸いです。

N: 海外大学から外務省を目指すのであれば、試験や就職活動も大変だと思いますが、ぜひ今いる環境でしかできないことも大切にしてください。そこで出会う人や感じることの一つひとつが、自分にしかない視点をつくってくれると思います。海外大学で得た経験や視点を自分の強みにして、ぜひ挑戦してもらえたらと思います。霞が関でお待ちしています。

特集２．２日目訪問

官庁訪問２日目で外務省を訪問した内定者も複数人います。
この特集ではそのうち３名のエピソードをご紹介します！



名前：Y

首都圏出身、関西在学、経済専攻

財務省→外務省→経済産業省

私には強烈な原体験があったわけではありませんが、人が自由に幸せを追求できる社会を創り、支えるために働きたいとの思いから中央省庁を志しました。とりわけ、経済と対外関係が今後の日本の課題であり、それらに対して広い視野を持って取り組みたいと考えました。そのため、２日目の外務省の他、財政を所管し国内外の課題に対して確固たる裏付けをもって取り組める財務省を１日目に、経済成長を通じた日本の豊かさの実現に取り組む経済産業省を３日目に訪問することにしました。ここで本当にやりたいことができるのか、ここで数十年楽しみながら働けるのか、など多くの迷いがありました。

しかし、外務省の業務説明（原課訪問）において、ある方から「理屈ではなく、君個人の拘りとしてやりたいことは何か？」「これは他人に任せたくないと思うことは何か？」と問われたことが契機となり、最終的にやりたいことは対外関係であると確信し、外務省を選択しました。加えて、官庁訪問中に接した外務省の皆さんが、３年目の方から管理職の方に至るまで大変魅力的で、一緒に働きたいと思えたことも大きな要因でした。

官庁訪問をはじめ、就活とは、普段は会えないような方々が真剣に貴方の想いに向き合ってくれる唯一無二の機会です。従って、できるだけ多くの人に会い、できるだけ想いを正直にぶつけてほしいと思います。また、その過程で、ぜひ外務省の扉を叩いてみてください。貴方の人生を変える出会いがあるかもしれません。





名前：I

地方出身
法学専攻（学部）・国際関係論専攻（修士）

警察庁→外務省→厚生労働省

「人が安心して暮らせる社会に貢献したい」という想いから、１日目に警察庁、２日目に外務省を訪問しました。国内の治安課題に向き合う仕事も、日本を取り巻く国際環境に働きかける仕事も、同様に重要だと考えていますが、官庁訪問前は、人々の身近な安全や安心を直接支える仕事に携われる警察庁をより魅力的に感じていました。

しかしながら、官庁訪問を通じて、グローバル化や情報技術の発展によって国境の境界線が融解していく中、国内の治安や安全に関する課題は、日本の国際的な立場や他国との関係と切り離して考えることはできないと実感しました。さらに、外務省の職員の方々にお話を伺う中で、外交は、人々が安心して暮らし、自分の人生を自由に生きられる社会の土台づくりに幅広く関わる仕事だと感じました。最後まで悩みましたが、自分の目指す社会をより幅広い視点から実現できる環境だと感じ、外務省を選びました。

官庁訪問について、２日目以降に訪問すると採用されにくいのではないか、という話を耳にすることもあるかもしれません。しかし、実際には、訪問日では判断されず、一人ひとりの想いや人柄をしっかりと見てくれます。臆することなく、最後まで悩み抜いてほしいです！



名前：S

首都圏出身、首都圏在学、安全保障専攻

防衛省→外務省→３日目訪問なし

大学では安全保障、特に島嶼防衛を中心とした準軍事分野に近い領域を専攻しており、学業を通じて最も接する機会の多かった防衛省を1日目、外務省を2日目に訪問しました。体育会に所属していたため説明会への参加機会が限られ、防衛省は10回弱、外務省はオンライン説明会1回のみ（他省庁は0）の参加で官庁訪問本番を迎えました。

訪問中の業務説明を通じて、自分の関心分野であり、携わってみたいと思っていた仕事は両省のいずれでも実現できると分かりました。そのうえで、外務省では直接的に安全保障に関わる業務に限らず、例えば文化外交などを含んだ対外政策という、より広い仕事に携わるチャンスがあります。自分の興味のある分野だけでなく、偶然の巡り合わせも含めて様々な学びや経験を得られる機会が多い点が、私にとってはより魅力的に映りました。もちろん、事前にもっと説明会に参加していればこの程度の違いは理解した上で官庁訪問に望めたのかもしれません。しかし、そういった違いに気づけることも官庁訪問、業務説明の意義だと思います。そして何より、そういったことに遅ればせながら気づいた訪問者に対して門戸を閉じることなく、広い懐で迎えてくれようとした外務省の雰囲気は心地よく、最終的に外務省を第3クール1日目に訪問しました。

もし今、外務省が第一志望ではない、他の省庁と迷っているという方、少しでも対外政策に興味があるならば、ぜひ外務省に訪問してみてほしいと思います。もしかすると、より広い機会があなたを待っているかもしれません。

特集３．官庁訪問再チャレンジ



名前：Y

日本史学専攻
政治学専攻(院)

学部4年で官庁訪問
(都庁内々定)
→院進後再挑戦



名前：N

地方出身

学部4年で官庁訪問
→休学中に再挑戦

外務省を志望した理由

Y: ウクライナ情勢を機に、平和な日本を守りたいという思いを抱くようになり、外務省を志望しました。学部時代は、外交を通じて日本の平和と繁栄に貢献し、日本人や日本企業の海外活動を支えたいと考えていました。再挑戦時には、その思いに加え、地域研究を通じてロシアの論理を学んだ経験から、立場や価値観の異なる相手とも対話を重ねる重要性を理解していることを強調しました。

N: 大学２年時の米国留学を機に外交に関心を持ちました。幼い頃から平和への高い関心を持っていましたが、留学中の様々な経験を通じて、当事者として平和な未来を創りたいと思うようになりました。

苦労したこと

Y: 自分に足りなかったことを素直に見つめ直したことです。人生を振り返って長所と短所を洗い出し、院ではその反省を踏まえて勉強と研究に打ち込みました。法学部出身の周囲との知識や考え方の差を痛感することもありましたが、諦めずに吸収し、特にロシア事情については人より詳しくなれるよう努めました。その甲斐あって、苦手なことから目を背けず、少しずつ向き合えるようになったことが今の自分の一番の良さになったと感じています。

N: 再挑戦を決めて自分と向き合うことです。一度目の官庁訪問後も外交への思いを諦めきれず、進路を熟考し、様々なことに挑戦して自分を見つめ直すために休学を選択しました。休学中は課外活動に取り組みながら外務省の説明会にも積極的に参加しました。大学院進学も選択肢にありましたが、最終的には、「今年挑戦しなければ後悔する」という思いから再挑戦を決意しました。

メッセージ

Y: 等身大の自分を信じよう！(Верь в себя!)

N: 官庁訪問をした経験があることを、最初はなかなかポジティブに捉えることができず、不安も大きかったです。それでも、外交への思いと全ての経験が自分を成長させてくれると信じて、今自分に出来る最善を尽くすことを心がけていました。外交を目指すまでの道のりも、再挑戦までの道のりも、人それぞれだと思います。応援しています。

特集４．社会人経験者



名前：O

地方出身・文学部

幹部自衛官としてのキャリアを経て外務省へ

自衛隊→外務省の理由

私は当初、日本の平和を守る国防という仕事に強い憧れを抱き、有事の際には自らが最前線で国を守る防壁となろうと考え、陸上自衛隊に入隊しました。自衛隊での勤務は大変充実しており、素晴らしい教官や同期、また部隊の方々の助けを借りながら資質・識能を涵養し、小部隊のリーダーとして得難い経験をさせていただきました。

しかし勤務を重ねる中で、日本の平和により積極的に貢献する道を模索するようになりました。近年厳しさを増す安全保障環境においては、防衛力の強化に加え、周辺諸国との関係改善及び同盟・同志国との関係強化は刻下の急務です。そして、それを最も実現できるのは外交です。日本の平和に生涯を尽くしたいという思いはそのままに、今度は有事そのものを発生させない防壁になろうと考え、外務省への転職を決意しました。

苦労したこと

〈公務員試験対策〉社会人3年目秋の受験で、勤務と勉強との両立に苦労しました。長期演習で勉強時間が確保できなかったり、夜遅くまでの勤務や訓練による疲労が溜まっているときもありましたが、意志の力で克己し、隙間時間を活用して乗り越えました。

〈官庁訪問〉平日を含め長くて約２週間仕事を休む必要があり、社会人にとってはなかなかの困難です。私は、職務を全うしないまま参加することは不誠実だと考えたこともあり、職場には退職を伝えた上で臨みました。ご縁がなかった場合、キャリアを失う恐さはありましたが、今こそ人生を懸けて挑戦しようという強い覚悟で挑みました。

メッセージ

社会人から目指す方は、相談相手が少ないうえに、周囲からは無謀だと思われることが多いと思います。また社会人に限らず、志はあっても、その門の狭さや自らの背景への自信のなさから挑戦を諦めてしまう方も多いのではないでしょうか。

しかし、外務省は多様性に寛容な組織です。実際、私のような文学部出身の社会人経験者に対しても大度を以て耳を傾け、受け入れてくれました。使命感や志がありながらもなかなか踏み出せずに迷っている方、応援しています。

特集５．専門職併願



名前：S

法学部・公共政策大学院

外務省専門職試験と併願

専門職を受けた理由

まず外務省を志望した理由は、 日本の強みを活かし、世界の問題解決と日本の平和と豊かさに貢献したいという思ったからです。国際協力への関心から、日本と他国との関係強化を通し、世界の課題解決に取り組みたいと考えました。

就職活動全体では、夏から冬にかけて報道業界や他省庁のインターンシップに参加しました。本選考は、政府系機関とコンサルティング会社を受けましたが、かなり数を絞っていたため、6月までは内定が１つもない状態でした。このように民間就活をあまりしていなかったことが、専門職試験を受けるモチベーションの１つになりました。

苦労したこと

専門職試験の時期が5月末だったため、官庁訪問の準備含めた就活や大学院の授業と試験勉強を両立させることが大変でした。その上、専門職試験の対策を本格的に始めたのが2月頃だったため、取捨選択をしながら効率的に勉強を行う必要がありました。

国際法と選択科目の憲法は学部時代に学んだことはありましたが、授業を受けてから4年ほど経っていたので、学びなおす必要がありました。知識のインプットにかけられる時間が限られていたため、予備校の映像授業で記述問題のポイントをつかみ、演習を繰り返して答案の書き方を身に着けながら、必要な知識を補填しました。

メッセージ

外務省への強い思いをお持ちの方には、ぜひ専門職試験も検討されることをお勧めします！新たに試験対策を行う大変さはありましたが、専門職試験受験の経験は、不確実なことが多い官庁訪問期間中、私にとって大きな安心材料になりました。例え苦手な科目があったり、準備量に不安が残っても、合格は目指せます。失うものはなく、むしろ得られるものが多いと思います！専門職試験との併願を通して、チャンスを広げてみるのはいかがでしょうか？

特集６．特殊な専攻



名前：K

文学部 考古学（旧石器時代）専攻

国家公務員専願

外務省を志望した理由

生まれ育った日本がこれからも誇れる国であってほしいという思いから志望しました。特に安全保障に関心がありますが、幅広い知見と手段が求められ、世界で働ける外務省の仕事に強く惹かれました。３年生の冬まで国家公務員と大学院進学で進路を迷っていたため、民間企業の就活はせず、国家公務員専願でした。

苦労したこと

就活で苦しんだことは主に3点です。第一に、外交官への憧れを言葉にする難しさでした。高校時代から憧れはありましたが、大学では異なる分野を専攻していたため、志望理由を整理するのに苦労しました。第二に、国際法などを専攻していなくても太刀打ちできるのかという不安がありました。説明会後に、外交・安全保障に関する入門書で知識を補うこともありました。第三に、周囲に外務省志望者や相談相手が少なく、公務員試験や官庁訪問に関する情報を自ら集めなければならなかったことです。OB・OGや実務経験者も身近におらず、多くの場面で手探りの就職活動となりました。

こうした苦労を乗り越えるため、就職活動で知り合った人を通じて対策グループに参加したほか、説明会で知り合った人たちと積極的に情報交換を行いました。悩みや疑問を共有することで、有益な助言を得られただけでなく、精神的な支えにもなりました。 また、説明会の前後に周囲の会話にも注意を払い、座談会等の情報を集めることもありました（あまり印象がよくないかもしれませんが、有効な情報収集手段だったと思います）内定者ノート等の体験記も熟読しました。さらに人事課の方に職員訪問をお願いし、業務内容に加え、就職活動の経験や学生時代の過ごし方についても伺いました。

メッセージ

就活中、「すごい」と思う志望者に出会い、自信をなくすこともあると思います。特に自分の専攻がマイノリティだと、外交の専門知識がある人はとても優秀に見えるものです。しかし、その時に「自分はこうはなれない」と線を引くのではなく、その人から“盗めるものを盗んでいく”マインドを大事にしてほしいです。外務省は本当に「色々な人がいる」場所です。不安な時も、自分らしさやオリジナリティを見失わず、自分自身を肯定してあげてください。

06. 採用担当者インタビュー



大臣官房人事課課長補佐
小畠一真

外務省大臣官房人事課の課長補佐（総合職採用担当）である小畠一真さんへの特別インタビューをお届けします。外務省職員としての仕事の魅力や一緒に働きたいと感じる学生像などについて率直にお話しいただきました。ぜひ昨年度のインタビューと合わせてお読みください。

小畠一真

Kazuma KOBATAKE



大学時代にフランスで２年間留学し、入省後は国際法課に配属。フランス語研修としてフランス国立行政学院（通称ENA）で学び、パリの大使館で勤務。帰国後は地球規模課題総括課にて国連経済社会理事会（ECOSOC）の理事国選挙の選挙対策班長や国際協力局政策課でのODA予算班長としての業務などを経て、現在は人事課にて総合職の採用を担当。

外務省を意識するようになったきっかけと入省を決めた理由

外交官を意識したのは高校生の時で、模擬国連の活動がきっかけでした。各国の大使になりきって、地球規模課題や安全保障について議論することが素直に面白かったんです。普段慣れ親しんでいる日本の視点ではない、別の国の立場や観点から物事を多面的に理解するということ自体が自分の知的好奇心を満たしてくれるように感じました。この頃から外交官という生き方や働き方に漠然とした憧れを抱くようになりました。

大学では経済学部に進みました。経済という言葉の由来となった「経世済民」という四字熟語の通り、国の経済的な豊かさを強めることが広く世の中の役に立つ、という考え方に共鳴したからです。就職活動でも、最初は経済官庁や銀行を中心に見ていました。経済というフィールドで、じっくり物事を考えたり、世の中にアウトプットする働き方に魅力を感じました。

一方で、自分の性格を細かく分析すると、一つのフィールドにとらわれないで色々なことに挑戦したいという思いもあることに気付きました。多分原点は高校生のときの模擬国連での、分野横断的な議論に感じた面白さだったと思います。経済はもちろん大事ですが、それ以外にも安全保障、国際法、開発協力、広報文化などの課題があり、そしてそれに関連する国や地域も多岐にわたります。それらを広く学びながら一つ一つの課題に取り組む方が、より学際的なアプローチが取れて、自分の性格に合っていると思いました。最初に関心を持った経済を排除するのではなく、双方をバランスよく実現できる職場として外務省を選びました。

外務省職員として大切にしている価値観や信念

食わず嫌いしないということをモットーに目の前の仕事に取り組むよう、自分に言い聞かせるようにしています。外交官としての10年のキャリアは想定外のことばかりでした。大学で学んだ経済と安全保障が自分の畑になるとなんとなく思っていたら、最初は門外漢の国際法。フランス大使館は自分の関心と重なる配属でしたが、その後の地球規模課題総括課の経済社会理事会の選挙対策も、ODAの予算編成も、今の人事も想定外でした。

説明会でよく、「今後グローバルサウスとの向き合い方が大事になる」という話をするのですが、それを実感をもってお伝えできるのは、ODAの予算編成の仕事で、グローバルサウスをつなぎ止めるツールとしてのODAの意義を財務省との交渉で説明し、カンボジアやマレーシア、パナマの現場も見たからです。もともとアンテナを張っていなかったところであっても、腐らずに取り組んだからこそ21世紀後半における日本外交に対する自分なりの問題意識やビジョンを持つことができるようになったと思います。

新しい配属では戸惑いや不安を感じることもあるものの、とりあえずやってみて、学べることを最大限吸収する。2、3年の配属期間を終えるころには、「この人なら大丈夫」と任せてもらえるところまで専門性を磨く。そうすると仕事も面白くなり、視野が広がって、人間としての深みも出てきます。それを一番体験できるのが外交だと、10年働いてしみじみ実感します。

外務省職員のロールモデル

難しい質問です‥省内のロールモデルは山のようにいて、一人を選ぶのは失礼になるくらいで‥少しアングルを変えてお答えしましょう。在外研修でフランス外務省の国際法局で2か月インターンをしたときに出会った局次長です。私が通っていたENAの先輩でした。国連のグテーレス事務総長の補佐官として出向していた経験もある、エース級の方でしたが、物腰が柔らかくて、日本のことも大好きで、好奇心の塊のような人でした。

その局次長は、背景から丁寧に論じるフランス教育を受けてきたにも拘らず、結論先行型の英米や日本、さらに中国、中南米と、相手に合わせて言葉遣いや論理構成を器用に使い分けていました。国連事務総長へのブリーフィングを結論1分、紙1枚で行うよう叩き込まれたからだとか。各国の外交官の交渉スタイルや弁論方式は様々ありますが、慣れ親しんだコミュニケーションスタイルから脱却し、相手に伝わるメッセージを発信することは容易ではありません。、彼の場合は好奇心と柔軟性ゆえでしょうか。私も、相手の立場や考え方について想像力を働かせながら、同時に最も効果的な方法で自らの考えを明確に伝えることができる外交官になりたいと強く思うようになりました。



カンボジアのプノンペン上下水道処理場でのODAの視察にて

入省前には想像していなかった仕事の面白さや魅力

これもいろいろありすぎて答えづらいですが、常に学び続けられるということはこの仕事の醍醐味だと思います。10年働いてきて、大変なこともプレッシャーや不安を感じることも多々ありましたが、毎回異動するころには、「ああ、成長できたな」と感じられます。

例えば、入省後最初の配属で国際法課に行ったとき。当時は国際法は全くの門外漢でしたから右も左も分からず、先輩にもたくさん迷惑をかけました。しかしそこで叩き込まれた知識や考え方が、思いがけない形で在フランス大使館での勤務時に役に立ちました。ニューカレドニアの領事事務所の開設にあたって賃貸借契約を結んだときのことです。皆さんが一人暮らしをした場合に交わす賃貸借契約と異なり、フランス国内の法令も調べながら、外交関係に関するウィーン条約に基づく外交官の特権免除項目も踏まえる必要がありました。国際法の交渉を一人でまとめられたのも入省時の苦労があってこそでした。

外務省で経験した一つ一つが自分の成長につながり、前の経験が次のポストで活きる場面が必ずあります。それがこの仕事の面白さと魅力で、自分にとって大きな発見だったように思います。

学生時代の経験が入省後に思いがけず役立った場面

大学時代にフランスで2年間一人暮らしをして、アパートで水漏れや備品の故障などのトラブルが発生した際の大家との交渉では絶対に折れないメンタルが鍛えられ、想定外の困難に対して打たれ強くなったと思います。自炊ができるようになったことが、在外勤務ではとても助かりました。

在外研修は1年半がコロナ期間で、お店にもほとんど行けなかったので、自分で食事を工面する必要がありました。学生時代に朝昼晩を自分で作る習慣があって、一日の流れを工程管理するような感覚も身についていました。それに、現地の食材で料理を楽しむことは、その国の風土や文化を学ぶことにもつながります。フランス留学中も大使館勤務でもやってよかったと思います。



外務省職員としての今後の目標やビジョン

キャリアに関することでいうと、どの仕事を任されても、「この人なら任せても大丈夫」と言ってもらえるような人間になりたいと思っています。この年次になると、特定の分野については知見があっても、まだ足を踏み入れたことのない分野には不安があるという話を最近同期や先輩後輩から聞きます。そういった不安を持たずに、色々な仕事を縦横無尽にできるようになりたいです。特定の部署に絶対行きたい、逆にこの部署は絶対に嫌だということは、不思議とありません。

その上で、あえて特定の分野で成し遂げたいことは何かと聞かれたら、安全保障分野の仕事にはいずれ従事してみたいと思っています。外交とは、あらゆるツールを活かしながら仲間を増やし、敵を減らすための活動だと捉えています。その意味では、様々な国を巻き込んで日本にとって望ましい国際環境を維持・強化するための乗数効果を生み出すという意味において、外務省の所掌分野はいずれも広い意味で我が国の安全保障に資する活動に含まれるかも知れませんが、唯一の同盟国であるアメリカの他、インド太平洋地域における同士国との連携をハードの安保分野にも広げる取組に微力ながら貢献してみたいと思っています。

「将来一緒に働きたい」と感じる学生

好奇心の強さに加えて、想像力が豊かな人だと思います。例えば、大使館で数百人規模のレセプションをするとき、相手が一番心地よくいられる時間と空間をつくるために、どれだけ機微に動けるかは、外交官の重要なソフトスキルだと思います。相手が何に関心をもっていそうか観察した上で話を振ってみたり、人となりが分かれば合いそうな人を紹介したり。

ハードな交渉も同じです。相手国の言語で日本の立場を淡々と主張し続ければ通じるかというと、そうではありません。相手も必死に自分たちの「べき論」をぶつけてきます。相手に迎合する必要はありませんが、相手のプリズムで物事を捉える柔軟性を持ち物事を多面的に理解しながら自らの考えを明確に訴求する、そういう想像力を持つ人は、外交官に向いていると思います。

採用担当2年目としての気づき

１年目は、皆さんの人生の進路選択における必要十分条件（数ある仕事の中で、なぜその道でなければならないのか）の言語化を最大限サポートすべく、多面性に富む外務省業務を可能な限りありのままお見せすることに取り組んできました。

外務省に関心をお持ちのみなさんは、各省庁や業界との共通点や相違点などの客観的な情報は、（少なくとも10年前に就活していた私と比べて格段に）とても器用に分析し、自分なりに消化していることが見て取れたように思います。

２年目の採用広報では前述の姿勢を基本としつつ、日本が抱える数多の課題するという「べき論」と、一個人として実現したい生き様を体現する「べき論」のかけ算の解を探す方程式を解く皆さんの就職活動に全力で伴走させていただきたいと思っています。

学生へのアドバイス

就職活動中、情報量に翻弄され、迷うことが多々あると思います。また、周囲との比較や「理想の外交官像」を意識しすぎるあまり、自分に足りないものばかりが気になって自信を失いかけることもあるかも知れません。

しかし、進路選択で大切なのは、客観的な基準や指標だけで答えを探すことに満足せず、、自分の主観に基づき判断すること。まずは自分の内面と向き合い、何に喜怒哀楽し、やり甲斐を感じ、心がときめきを感じるのか、丁寧な自分探しを心がけてみてください。

飽くなき好奇心で学びと成長を続けながら、国際社会における日本の自己実現の幅を広げる。そんな21世紀後半を見据えた日本外交の軌跡を一緒に描く仲間と仕事できることに期待を寄せ、みなさんの挑戦をお待ちしています。

内定者からのメッセージ

就職活動は「なんでも」聞ける絶好の機会です。一生懸命取り組むことで、きっと皆さん一人ひとりの価値観を揺さぶる経験になると思います。
実際、民間就活を通じて、それまで安全保障への興味一辺倒だった私が、日本の企業を外交の力でサポートする経済外交に興味を持つようになりました。戦略的に数社に絞るもよし、興味があるだけエントリーするもよし、とにかく悔いが残らないように全力で駆け抜けていただければと思います。応援しています！！

公務員就活においては、国家公務員試験・説明会など官庁就活イベントへの門戸は学生全体に開かれているため、全体的に対策の早期化が進んでいるかと思います。この傾向は必要な取り組みの結果だと思いますが、直前になって国家公務員に関心を持った方は周りと比較してスタートが遅れたのではないかと不安を感じるかも知れません。
私も今更遅すぎるのではないかと怯えながら、なんとか頑張っていました。ですが、（運よく内定をいただけたから言えることかも知れませんが、）遅すぎるなんてことはありません！あなたが挑戦したいと思ったその時が、あなたにとって国家公務員を目指す最良のタイミングなのだと思います。応援しています！

就職活動を経て職業選択において本質的に重要だと感じたのは、社会的な評価や労働環境の優劣ではなく、どのような価値観のもと働くのが最も自分の性に合っているのか、どのような人と働きたいのか、という点です。後者に関しては実際に働いてみるより他に確実なことは何もわからない以上（官庁訪問で出会った職員の方々も入省同期も、本当に尊敬できる素敵な人たちばかりですが）、やはり重要なのは前者の「価値観」だろうと思われます。
これは志望動機を突き詰めていく中でぼんやりと見えてくるものだと思いますし、採用担当の小畠さんが繰り返し口にされていた「自分の言葉で語る」「どのようなアプローチの職業を選択するか」とはそういうことだったのかもしれないと自分なりに理解しています。
みなさんにとっても納得できる就職活動となるよう願っております！

自分の行動・判断が公電や記録を通じて100年後も直に批判に晒される緊張感は、どの民間組織にもない外務省の特徴だと思います。目先の数年を超えた中長期の国家作用の一端を担うという歴史的嗅覚、「地球儀を俯瞰する」地理的な視野の広さを鍛えられるというのは、豊かな人生を形作ってくれる貴重な経験となるのではないでしょうか。

一度きりの人生なので、精一杯悩み抜いて、自分のために何ができるかを常に考えて動き続けていただけたらいいのではないかと思います。後悔のない、自分に納得のいく就活となることを願っております。

各種SNSにて情報発信中！

INSTAGRAM

X

FACEBOOK

公式ウェブサイト



外務省 総合職 内定者ノート 2026

本体価格 0円

0 35545 62336 78 1

2026年内定者一同